『むかしあったじ』

青森県三戸郡倉石村の民話

千葉大学日本文化研究会
民話分科会編

本書は、一九八三年（昭和五八年）十一月一日に発行された手書き謄写版刷りの民俗調査報告書の『むかしあったじ』（青森県三戸郡倉石村の民話）をリポジトリ公開用に活字化した覆刻版です。

本書を作成するにあたっては、明らかな誤字脱字等を修正したほか、漢字とひらがなの使い分け、および句読点の位置の変更等をおこなっています。また、誤読しやすい部分には、ルビ・注釈などを付け加えたほか、地名・住居表示などは、調査当時のままで表記しています。

なお、現代では不適切な表現と思われる文章表現等については、当時の執筆者および話者からの採話を尊重して、そのままの言葉遣いで掲載してあります。

はじめに

照りつける太陽の下。汗をにじませて歩いた一本道。両側に広がるのは田んぼとリンゴ畑。

息をはずませて登った坂道。木立から吹き抜ける風は涼しい。草々の緑の中の赤い花。溢れるばかりの自然の中、私たちは登っていく。道を登り切ると、急に広がる視界。あっ、馬だ。黒く光る馬たちが草をはんでいる。あぁ、のどかだ。

これはある日の、調査集落に行く途中の出来事です。このような経験ができるのも調査の醍醐味です。日々、都会というところに住んでいる私たちは、こんなことに出会うと、やすらぎ、無限の空想さえ感じるのです。

民話、つまり昔話も私たちをそんな気分にさせてくれます。昔話は、語り手と聞き手の二つのものが存在するだけでよいのです。何も囲炉裏端でなくとも、雪降る夜でなくとも、「昔語り」は私たちを引き付けます。見えない不思議力が、語りの世界へと誘い込むのです。調査をするたびに、私たちはますます語りのとりこになり、語りを追い求めずにはいられなくなるのです。

そんな私たちが、村の一軒一軒訪ね歩いて語られたものを集めたのが、この『むかしあったじ』(青森県三戸郡倉石村の民話)です。文字では語りの声がお聞かせできないのは、大変残念で口惜しいことですが、本誌で民話に魅力を感じていただければ幸いと思います。そしてさらに、これを読んでいただいて「語り」を聞きたいと思ってくだされば、もうこれ以上うれしいことはありません。私たちが聞く気になれさえすれば、語りはいくらでも聞けるのです。語りがなくならないで欲しい、それが私たちの願いです。

最後に、調査にあたって私たちをあたたかく迎えてくださった倉石村の皆様方に感謝するとともに、心からお礼を申し上げたいと思います。

一九八三年　秋空高く晴れ上がる日

民話分科会一同

もくじ

はじめに　二
倉石村の地図　六
倉石村の民話　編集にあたって　七
倉石村について　七

【昔話】

ねずみ浄土①（中市）採話地区名　八
鼻かけの昔話（中市）　九
鬼の酒盛り（中市）　一一
一太郎二太郎三太郎（中市）　一二
屁ひり女房（中市）　一四
ねずみ浄土②（中市）　一五
雁汁（中市）　一六
三枚のお札（中市）　一九
桃太郎（中市）　二〇
鬼の酒盛り（槍沢）　二二
屁たれ嫁（槍沢）　二四
おむすびころりん（沼沢）　二五
おむすびころりん（鳥沼新田）　二五
屁たれ嫁（鳥沼新田）　二五
長い話（鳥沼新田）　二六
継子話（子安様になった継母）（北向）　二六
蛇むこ入り（北向）　二七
うりひめこ（北向）　二八
馬鹿むこ（北向）　二九
食わず女房（北向）　二九
箱の中にガマのいた話（北向）　三〇
桃太郎（山田）　三〇
田っこ作り（山田）　三一
田っこ作り（太田）　三一
うそつきの話（太田）　三二
梅こ花こ（太田）　三三

馬鹿むこ（太田）……三五
海を見たことのない夫婦の話（太田）……三六
長い話①（太田）……三六
花咲かじじい（太田）……三六
かちかち山（太田）……三八
ネズミの嫁入り（太田）……三八
きつねの嫁入り（太田）……三九
和尚と小坊（太田）……三九
鬼のばくち（太田）……四〇
長い話②（太田）……四一
桃太郎（太田）……四一
うそつきの話（牧内）……四二
ネズとカエル（牧内）……四二
きつねの三味線弾き（宮台）……四三
鬼の賭博（宮台）……四三
歌う骸骨（宮台）……四四
屁ひり女房（宮台）……四六
絵猫とネズミ（宮台）……四八
豆腐の好きな和尚（宮台）……四九
長い話（宮台）……四九
なまけ者と大黒様（舘町）……五〇
きつねにだまされた話①（古川代）……五一
笑わぬ神様（古川代）……五四
尻鳴りへら（古川代）……五六
みちくさ（民話採訪雑記）……五八

【伝説】

ザシキワラシの話①（太田）……五九
ザシキワラシの話②（鳥沼新田）……五九
マタギの話（北向）……五九
きつねにだまされた話②（北向）……六〇
きつねにだまされた話③（北向）……六〇
きつねにだまされた話④（北向）……六一
きつねに化かされた話①（舘町）……六一

きつねの馬車（太田）　・・・

あやとり歌（お手玉歌）②　（太田）・・・

倉石村の民話 編集にあたって

この民話集に収録した民話は、昭和五八年七月に、青森県三戸郡倉石村で採話したものです。ただし、補遺の項には、三月に行った予備調査で採集したものもあらすじの形で掲載しました。「昔話」と「伝説」に大別しましたが、これらの区別は明確ではなく、分類のあいまいな話もあります。

話は、村のみなさんからお聞きしたものをテープレコーダーで録音し、再びテープから文字になおしました。文字化はできる限りテープに忠実であるように心掛けましたが、どうしても聞きとれない部分は（・・？・・）と記しました。また、わかりづらい箇所は編者が（　　）内に意味を補いました。題名は、編者が付けたものです。唱歌、絵本などで知られている話は、一部省かせていただきました。

倉石村について

青森県三戸郡倉石村（現在の三戸郡五戸町）は、県東南部に位置する静かな農村です。

五戸川が村の中央を西から東へ流れ、その両側に標高一〇〇～二〇〇メートルの丘陵が続いています。川に沿って水田が帯状に広がり、丘陵地帯は果樹園、畑に利用されています。人口は四〇五二人、第一次産業従業者が全体の六五％にあたる一二八五名です（共に昭和五五年度）。農産物では、米・リンゴがまずあげられますが、そのほかに、長いも・にんにく・しいたけ等の生産も増加しています。

ひとびとの生活には、ゆとりが感じられ、良い意味での「村らしさ」を残した包容力豊かな村です。調査に訪れた私たちは、ただ、ただ感激するのみでした。

また、教育にも熱心な様子で、村のあちこちに教育標語を見つけ、近代以来、幾多の名士を輩出している南部地方の、人創りのうまさを垣間見る思いでした。

【昔話】

ねずみ浄土①

（話者の居住地区名）
（中市）

おじいさんとおばあさんとあって、おじいさんは毎日、山さ たきぎとりにいったと。おばあさんは毎日、団子をこしらえて 持たしてやったと。

おじいさんが木の切り株に腰をおろして、団子を食べようとしたっきゃ。その団子が 手からころっところんで、ねずみの穴さ、ちょろっと入ってしまった。

「はぁ、食べるのなくなったなぁ」

と思ってたら、そこさねずみが出てきて、

「やあやあ、おじいさん。おじいさん。おじいさんの団子ごっつぉになったから、おじいさんをこれから私のところに連れていきます。私のしっぽさ とっつかまって」

そっで、おじいさんが、ねずみのしっぽさ ずりっと とっつかまったと。そうしたら、ねずみの穴が、へえるときは、小さいと思ったっきゃ、大きいひろーいところになったと。そうして行ったと。そうしたら、ねずみがいっぱいいて、

「百になっても、二百になっても、ニャゴニャゴの声っこば聞きたくない。ドーンドーン」

って、米はたきしていた。

「百になっても、二百になっても、ニャゴニャゴの声っこば聞きたくない。ドーンドーン」

おじいさんがそれ見ていたら、ねずみが それ終わってから、たくさん ごっつぉして、

「おじいさんの団子ば ごっつぉになったから、今度は私らが ごっつぉしてあげます」

って。そして帰りにも みやげを持たせて、おくっていったと。

それを聞いて、隣のばさまが、

「おらん方のじいさまも、そうゆうところさ連れていって、おみやげもらってきてあげたい」
と思って、団子こさえて、じさまさ 持たせてやったと。じさま 山さ行って、ころばぬ団子 ころばしたと。穴さちょろっといれたと。そったら、やっぱり ねずみが出てきて、連れていったと。そしたら やっぱりねずみが いっぱいいて、
「百になっても、二百になっても、ニャゴニャゴの声っこば聞きたくない。ドーンドーン」
って、いっしょうけんめい、米はたきしてた。
そしたら、そのじいさまが、
「ニャゴー」
ったと。そしたら、はあ、ねずみは いなくなってしまったと。ニャゴーって ねこが来たと思ったから、ねずみは いなくなって、まあっくらになって、はあ、どこさも行けなくなって、そのじいさま 一生懸命 土をほって、やっと外さ出てきたと。そしたらばさまが、
「やあ、このくされじっじは、なぁんも もらいもしねえ。傷だらけになって帰ってきた」
って。ばさまがおこったと。人のまねすれば、ろくなことないって。そっだら話。

鼻かけの昔話

（中市（なかいち））

鼻かけの侍があって（鼻がないので、あまり外には出たがらなかったが、ある日）、
「こんなに陽気がいいのに、うちの中にばかりいないで、散歩に出かけたらどうですか」
って、奥様がゆうたそうです。で、それでは というんで、馬子をたのんで、出かけたそうです。そして、出かけたら、だんだん気持ちがよくなって、
「馬子、うたでもよむかな」

「どうぞ」
「それじゃあ」
ってので、侍の旦那さんが、その馬子が、頭はげだったそうです。
「前に鳥居はなけれども、うしろに神（髪）っこが鎮座まします」
とよんだ。
「はあ」
って、馬子は ばかにされたと思っても、
「いかにもご名句です」
「じゃあ、今度は、馬子もひとつどうじゃ」
馬子は、
「じゃあ、私もひとつ よみます」
で、馬子がよんだのが、
「世の中に 名所七跡は多けれど、花（鼻）なき里は さびしかりける」
とよんだんです。そうしたら 旦那さんはおこって、馬からブンとはねおりて、
「かかあ、かかあ、おまえ、おれが行かないというのに、行けえ、行けえ、とやって、馬子にばかにされてきた」
って。そしたら奥様が、
「うちの旦那さん、どうしてそんな ばかにされたか、くちおしい」
と言ったそうです。そしたら旦那さんが、
「おれに鼻がないから、はなおしい」
って、そう言ったそうです。昔、馬子でも たいへん知恵がはたらいたという話で・・・

鬼の酒盛り

（中市）

正月のはなもち、一生懸命こしらえてたそうで、そしたら、そのもちが 手からころんところがって、あの、ころころころころところがったと。ばあさんが、

「どこまでいく。だんご殿、どこまでいく。だんご殿、だんご殿、どこまでいくの」

って、あと追っていっても、ころころころころと、ころがっていったと。山のお寺さいって。山のお寺に、地蔵さんがあるんです。石の地蔵さんが立ってて、その地蔵さんが、

「今、団子ころがってきたから、おらそれ、ごちそうになった。今、団子ば ごちそうになったから、いいこと知らせる。今に、ここに もう少しいれば、鬼が いっぺえ集まってくるすけに、そのとき、ときみて コケコッコウ と言えば、鬼は、はあ 夜明けだと思って逃げるすけに、そのお堂さ かくれてなさい」

って、知らせたです。そこで、じいさまが そのお堂さ かくれて、だまって見てたらば、鬼がいっぱい集まってきたと。青鬼だの、赤鬼だの、子っこ鬼だのって、集まってきて、踊ったり宝もんを山わけして、そしたら（じいさまは）だまーって見ていて、ちょうどよいくらいになってから、

「コケコッコー」

と言ったら、

「そら夜明けだ。はあ、たいへんだ」

その宝ものも何も、はあ、忘れたんだか、置いて、鬼が逃げてったっきゃ。

「はあ、いいあんばいした」

と思って、じいさまが、宝ものをずるっとさらって、うちさ持ってきたと。

それを聞いて、隣のばあさまが、もちこせえて、ころばしたと。そのころばない団子もちを、一生懸命ころがしてって、やっぱり、地蔵様が、食ったつ。そっだら、

「今に、あの鬼が集まってくるすけに、そこさかくれて見ていろ。よいくらいになったら、コケコッコーって言え」

って、知らせたです。
そして、そのじいさまが、かくれて見ていたっきゃ。鬼が集まってきて、宝もの持ってきて、わける気になっていた。そのじいさまが、待ちかねて、
「コケコッコー」
ったっきゃ。鬼ども、なんだかおかしいと思ったども、逃げたっきゃ。その子っこ鬼、垣根さ ふんどしひっかけて、逃げれねえだと。それ、おかしくておかしくて、そのじさま、
「あっはははは」
って笑ったと。笑ったっきゃ。その子コ鬼は、
「ややや、人間だ、人間だ」
なんも、なんも、はあ、みんなを呼んだと。そしたら じいさまは、鬼にはたかれて、宝ものもとらんないで、逃げてきたち。だから、ばあさま おこって。だから 人のまねしねえだって。
どっとはらい。

一太郎 二太郎 三太郎

（中市）

ある日、お父さんが病気になって、もういつ死ぬかわからなくなったので、三人の子どもを枕もとに呼んで、
「あの、わたしがいつ死ぬかもわからないんだじ、おめたち、跡取りを決めてえすげに、今からうしろの山さ行って、たきぎをとってこい。一番働いて、一番たくさんとってきたのに、この家をつがせるから」
というので、
「一番先に、一太郎から行ってこい」
って、言ったじ。そしたら、一太郎が、鉈(なた)を持って、しょい縄を持って、そして行ったど。そしてまもなく、
「ああ、おっかね、おっかね」
って言って、もどってきたじ。青くなってもどってきたど。
「いやいや、なんにもならねえ、このわらしは。じゃあこんだ、二番目の二太郎が行ってこい」
ということで、今度は、二番目の二太郎さ、鎌(かま)だの、鉈、

しょい縄を持たせて、山さやったと。たら、その二太郎も、
「いや、なにがいたんだか、おっかなくておっかなくて、おらとっても、はあ、たきぎもなんにもとらんねえできた」
「いやいや、なんにもならねえ奴だ。二人だら、三番目の三太郎が行け」
そこで、三太郎がこんだ、鉈だの、しょい縄を持って、山さ行ったら、そったら、
「兄が二人、おっかなくて もどってきたども、なにがいんだべ」
と思っていたら、
「ぬいでけろ、ぬいでけろ」
また少したてば、
「ぬいでけろ、ぬいでけろ」
と聞こえたと。
「なぁんの音だべ」
と思って、勇気を出して、その三太郎が行ってみたところが、サルが木のまたさ はさまって、抜けねえで、
「ぬいでけろ、ぬいでけろ」
って、言ってたど。
「いやいや、こりゃたいへんだ。今 ぬいてやるから」
そして、サルを助けただと。そしたらサルがよろこんで、
「お礼にこの赤い頭巾をくれるから。この赤い頭巾をかぶれば、なんでも、動物の鳴く声がわかる。言葉になってわかる」
と、そう言って、赤い頭巾をお礼にくれた。
こっだ、三太郎がたきぎをしょって、その頭巾をかぶって、そっで来たところが、大きな木の上にカラスがとまって、
「この木の下に金がある。この木の下に金がある」
って、鳴いたのが聞こえたと。そこで三太郎がたきぎをおろして、その木の下を掘ってみたところが、大判小判がザックザクと出てきたど。そこで、その宝ものを、それしょって、たきぎをしょって、うちへ帰ってきたら、お父さんが、

「あー、やっぱり一番働き者で、勇気のある者を跡取りにしたいと思っていたら、やっぱり、三太郎だ。三太郎に、うちの跡つがせる」
こう言ったど。それで、働き者の三太郎がそこのうちの跡取りにきまったど。

屁ひり女房　　（中市）

嫁(よめ)っコがあったと。その嫁っコがだんだんやせていったと。
「いやいや、あねっコ、あねッコ、どうしておまえは、そっだら やせたんだ」
って。だって、嫁っコは、屁ったれですけに、それ がまんして、しゃべらねえでいたんだけども、いやいや、だんだんやせていくんだす。

「なにしてそんなにやせるんだ」
って。（おばあさんがたずねると、嫁は）、
「しゃべりたくねえども、おばあさん、なんもかも、屁でたくて、それがまんしてるんだ」
って言ったと。
「遠慮もなんもいらねえすけに、屁たれたかったら、たれなさい」
って言ったと。
「んだら、炉(ろ)のふちさ、とっつかまってください」
って言ったと。おばあさん、炉ぶちさ、こんと とっつかまっていたと。
そっだら（嫁が）屁たれたっきゃ。ドーンと、おばあさんが飛ばされて、いやいや、これはたまげた。たれた・・・
（以下、どうしても思い出せず）

ねずみ浄土 ②

（中市）

おにぎりころころ、なあんつったがな・・・なんとかだって、しゃべるじぉ。ほら、穴の中にいれてな、ほらこのおじいさんが かんげえて、ほら いっぺえにぎってきたの。またいれると、おもしろくて、また その声聞きたくてな、おにぎりころころ、なぁに言ったげな。なんとかだって、こう言ってな。そったら、またほれ、いれて、五つか六つ、いれたら、自分が食べる分もなくなったと。そして、

「やあ、これは、食べねえで、みな おにぎり穴の中さ いれた。穴の中さへえってみてえな」

と思ってみたところが、ほれ、その穴の中にねずみがいっぺえで、ほれ おにぎり わけて食べてたと。で、

「おじいさんよ、この穴さ へえれ」

で、おじいさんを、ほら、反対にごっつぉ(ごちそう)して、そしたら、ごっつぉして、おじいさんが、おもしろくて、こっだほれ、おどったと。おじいさんが、

「おどったし、うだったし、ごっつぉにもなったし、帰る」

って。そしてよろこんで、うちさけえって、おばあさんさおしえたど。あっ その、家さ くる前に、来るときに、

「ねえこ(猫) の声ば、聞きたくねぇ。ニャンニャン」

っったげ。そういってきたど。ほっで、みやげもらってきたど。

そっで、隣のおじいさんが、ほれ、この話きいて、またにぎりめし いっぺえしょっていったど。で、穴さ、ころがなくても、いれたど。そっで穴さへえって、ごっつぉ食べてから、はあ、

「ねぇこ の声は、ききてえ、ニャンニャン」

ったど。さあ、そうしたら、猫らいっぺえではってきて、ねずみとってくったど。はあこんど、このおじいさんが穴から ではってくれないんで、そこで死んだっ。

むかし(昔話だったとさ)っこだって。

雁汁

（中市）

おじいさんとおばあさんがあって、そのおじいさんが犬を飼って、ごはんを一杯食べさせれば一杯だけ、二杯食べさせれば二杯だけ大きくなったって。そしたら（犬が）おじいさんに、

「わたしに鞍（くら）をおけ」

って。そして、

「山さ行って ししとる」

って。

「あっちの山からもししょこ（来い）。こっちの山からもししょこ」

って。（叫んでししを呼んだ）

まさかり持って、ぶったたいて殺して、ししコ汁煮てたら、隣のおばあさんが、

「火っこ たもれい」

って。あれ、あの昔は、朝起きて、炉に火たくにも、マッチもねえときだんだがで、燃した火をいけて、火種っこ 大事にとっとくの。それを（隣のおばあさんが）もらいにきて、

「火っこ たもれい」

って。

「火っこもたもるし、ししコ汁煮てっから、へえって、これ食ってごんじぇ」

って。

「うめえで、うめえで、うちさ持っていって、じっじにもまけぇんべ」

そしたら、

「じっじにけるのはこっちにある。そんだがら、食ってごんじぇ」

「そっだら、もらってく」

って。そして（隣のおばあさんは）外さいったら、（しし汁に）しょんべんっこ ひっかけて、持ってったっじ。

「隣のじっじが山さ行って、ししとってきて、ししこ汁煮

て、ごっつぉになってきた。食ってみろ」
って。
「しょんべんくせえでも、くそくせえでも、うめえで」
って。じいさんが食べたって。
「なに、人がもらってくれば、しょんべんくせえの、くそくせえのって。（・・・聴き取れず・・・）なら行って、犬借りてこねか」
（そしておじいさんが隣に行って）、
「犬っこ 貸してくだせえ」
って。そして、貸したっきゃ。「鞍(くら)おけ」だなくても鞍おいて、「まさかりつけろ」だなくてもまさかりつけて、山さ行って、
「なあんて言って ししとるんでえ」
って言ったっきゃ。
「あっちの山からもウーン、こっちの山からもウーンって言えばいいんだ」
って、ばさまが教えたっきゃ。そのとおりに言ったら、ほれ、人を刺すハチ、ここらへんでは、バチっての、バチが来て、刺しこ。なあんも、ししさ来ねえで、バチに刺されて、痛くて、てえへんだったって。その犬殺して いけで（・・・聴き取れず・・・）さしておいたって。そこさ、木を植えておいたんだっけなぁ。
その木が大きくなって、今度は、臼ほって、それでひいたら、米ジャクジャクと米ぁではった。
「米ぁふーれ、バァラバラ、米ぁふーれ、バァラバラ」
って言ったら、米ァバァラバラとふってきて、米のかゆ煮てたら、また隣のおばあさんが、
「火っこ たもれい」
って来て、
「火っこもたもる。米のかゆ煮てっから、入って、食ってごんじぇ」
って、（そして隣のおばあさんが）米のかゆ食って、
「うめえで、うめえで。じっじにもっこっこけえんべ」
「じっじにけるのはこっちにある。食ってごんじぇ」

って。また、米のかゆもらって、しょんべんひっかけたりなんかして、

「じっじ、また、隣さ行って、米のかゆもらってきた。食ってごんじぇ」

って。（するとおじいさんは食べて）、

「しょんべんくせえでも、くそくせえでも、うめえで」

「もらってきてくれば、しょんべんくせえ、くそくせえって」

「そっだ。なにやってんだ」

「（隣に行って）米の木借りてこねえか」

（そしておじいさんは隣に行って）、

「米の木（臼のことか？）貸してごんじぇ。なあんて（言って）米ふらすべ」

「べこのくそぁ ふーれ、ベータベタ、べこのくそぁ ふれ、ベータベタって言えばいいんだ」

って、米の木貸して、むしろひいたりして、

「べこのくそぁ ふーれ、ベータベタ」

って言ったっきゃ。べこのくそ、ベータベタとふってきて、大声で、

「ひとつも米ふんねえ、べこのくそばかりふって・・・」

って。（米の木を）燃してしまった。

（米の木を）燃したあくっこ（灰）持って来て、屋根さあがって、

「雁のまなぐさ（眼）、あぐ入れ、雁のまなぐさ、あぐ入れ」

って言ったっきゃ。雁のまなぐさあぐ入って、飛べなくなって、ポタポタと落ちて、雁汁煮たっけ。また隣のばっばきて、

「火っこ たもれい」

てきて、

「火っこもたもるし、雁をおせえて、雁汁煮てた。入って、食ってごんじぇ」

って。そっで、へえって、

「はあ、うめえで、うめえで。残して、じっじに持ってって、けえんべ」

「じっじにけるのは、こっちにある。食ってごんじぇ」
って。もらっていって（しょんべんかけて）じっじに食わせて（じっじが言うには）、
「うめえで、うめえで。しょんべんくせえでも、くそくせえでも、うめえ」
「もらってきてくれば、しょんべんくせえの、くそくせえのって」
「そっだ、なにやってんだ」
「そっだ、あくっこ もらってこ」
（そしてあくをもらってきて）
「なあんて言って雁とった」
「じいのまなぐさ、あくへえれ。じいのまなぐさ、あくへえれって言えばいいんだ」
って。（じっじは）屋根さあがって、
「じいのまなぐさ、あくへえれ。じいのまなぐさ、あくへえれ」
って。じいのまなぐさあくへえって、屋根から、ゴロゴロところげ落ちたっきゃ。ばば 下にいて、ガーンガーンとぶたれて、じじを殺したじ。
どっとはらい。

三枚のお札

（中市）

（和尚が）小坊主（こぼうず）へ、
「フンダマ（？）シにいってこい」
「はい」
っていったら、村の方まわって歩いたら、日が暮れて、暗くなって、ずっと山奥の方にあかりっこ 見えてたと思って、そこさ行って、宿を願ったっきゃ。
泊めるって、戸を開けてはピタッと閉め、戸を開けてはピタッと閉め、ずっと奥の方さ泊めて、そして、刃ものを研いでた音がして、そこをそーっと見たら、包丁かなんか

研いでて、おっかなくて、ねらんねえと思って、
「しょんべんでたくなりました」
って、（小坊主が言った。）
「しょんべんなら、そこらさ、でてやらねえか」
って。
「くそもでたくなった」
って。
「ほんに、困ったもんだな」
（そして小坊主は）便所さ行って、お札を便所の戸っこ さはりつけて、逃げた。
「小坊、まだだか」
（と聞かれると）
「まぁだ。まだ」
って、その札（おふだ）っこ しゃべったって。
「小坊、はぁ ええか」
「まあんだ。まだ」
「おせえな」
って、行ってみたっきゃ。なあんも、はあ、小坊いねえで、札っこ ばかりしゃべってて、あと追っかけた。
そしたら（小坊は）、おっつかれそうになって、札っこ パーンと投げて、
「（・・・聴き取れず・・・）ではれ」
そしたら、ほんにこれくらいの（・・・聴き取れず・・・）ではって、そしたら、また、あとさ、追いかけてきて、こんだ、
「大きい川 ではれ」
って札っこ 投げたら、川ではって、そして、その川さ入れねえで、もどったんだか、どうしたんだか。

桃太郎　　（中市）

おじいさんとおばあさんとあって、おじいさんが山へ柴

刈りに行って、おばあさんが川へ洗たくに行ったら、大きな桃が流れてきて、

「こっちへこい、こっちへこい」

って言ったら、桃は どんぶらこっこ、どんぶらこっこと 流れてきて、その桃をもってきて、戸だなにかざっておいて、おじいさんが山から来たら、

「洗たくに行ったら、この桃 流れてきて、拾ってきた」

と言って、戸だなから出して、包丁たてるべとしたら、桃は ひとりでに二つに じゃくっと割れて、中から大きな男の子が生まれて、それで、桃から生まれたから、桃太郎と名前をつけて、その桃太郎が大きくなったら、おばあさんに、

「きび団子 つくってくれ」

って。

「きび団子つくったら、鬼が島さ 鬼退治に行く」

って出かけたところ、ほれ、犬が来て、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらにおいでになりますか」

って言ったら、

「わたしは、鬼が島に鬼退治に」

「わたしも家来になりますから、つれていってください」

って。腰さつけたきび団子 ひとつやって、歩いていったら、こんど猿が来て、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらにおいでになりますか」

「鬼が島に、鬼退治に」

「お腰につけたきび団子、ひとつください。お供をします」

って。きび団子もらって、家来になって、こんど、雉(きじ)が飛んできて、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらにおいでになりますか」

「鬼が島に、鬼退治に」

「お腰につけたきび団子、ひとつください。お供します」

きび団子もらって、犬と猿と雉と、三匹 家来つれて、鬼が島に行ったら、赤鬼、青鬼、黒鬼、いっぱいいて、犬はワンワンて くっつき(くいつき)、猿は かっちゃき(ひっかき)、雉は鬼の目玉つついてあるったりして、鬼征伐して、宝物ぶんどって、車(荷車)

につんで、
「犬はひきますエンヤラヤ、猿は後押しエンヤラヤ、雉は綱引くエンヤラヤ」
って、宝物いっぱい車さつんで、うちさ帰ってきて、おじいさんおばあさんが出迎えて・・・

鬼の酒盛り

（槍沢）

むかしあったじな。山奥におじいさんとおばあさんと二人で暮らしていて、おじいさんが山へ働きに行って、寒い日で、おばあさんが、かゆっこ煮てらって、おじいさんの来るのを待ってらったって。そこにおじいさんが寒い日に帰って来て、
「あー寒い、寒いー」
って腹をひろげてあたってたら、その かゆっこが 腹さ どんとはねて焼けたんだと。焼けてその腹の皮が たくれてポロポロポロと落ちたんだと。その落ちたの、
「もったいね。せっかく腹の皮だから もったいない」
って、ザルさひろげて屋根の上さ 干してたんだって。干してたらトンビが飛んできて、そのザルがたりさらっていったんだど。さらっていってこんだ そのおじいさんが、
「トンビ、トンビ。腹の皮返してけろ、返してけろ。返してけろ」
って飛んでったトンビのあと追っかけてったら、ずっと山奥さ行ったら、暗くなったんだと。そして暗くなって、おじいさんが、
「帰れなくなったなぁ」
と思って、あたりズーッと見たら、ボァーッと明かりが見えてきたんだと。その明かりっこを頼りにそこさ行ってみて、節穴からすき見してみたら、中に青鬼、赤鬼、さまざまな鬼がいっぱいいて、酒盛りしていらったんだって。
「何の酒盛りだべなぁ」

と思ってすーっと見たら、昔の小判っていうか、ああいうのいっぱいひろってきて、盗んできたり、それ 分け合って喜んでらったんだと。と、おじいさんは、鬼というものは、カッケローっていうカッケロー虫(むし)をおっかながるなぁ と思い出して、そこでためしにやってみたんだと。

「カッケロー」

って叫んだら、

「そらぁ、カッケロー虫が来たぁ」

って、さかんで全部逃げたんだって。その お金ば みんなおいて。

そして逃げたところで、あーあと思って、おじいさん喜んで 中さ入って、いっぱい拾って、夜明けてから家さ帰って来て、そして かぞえてもらったんだって。かぞえてたら、隣のおじいさんが遊びに来たんだと。そいで様々その話を聞いて、したら、

「おらも行ってみる」

そうやって、おじいさんもこんだ その話のとおり、聞いて行ってみたんだと。やっぱり暗くなって、また明かりっこがついて、で、そこへ行ってすき見してみたら、また同じにやってたんだって。

「ああ このことだなぁ。聞いてきたのと同じだなぁ」

と思って おじいさんが、カッケローの真似してもいっかい、

「カッケロー」

って言ったんだって。そしたら、

「そらァ、カッケロー虫が今夜も来た、また来たぁ」

って逃げたんだと。でしぇ、ひとりの青鬼が あんまり慌ててしまって、柿(熟した柿?)づきさ鼻ひっかけたんだと。

「たすけてけろぉ。たすけてけろぉ」

っても 皆逃げててしまったし、それをすき見して 見てたおじいさんが、余りにもおかしくて笑ったんだって。そしたら青鬼が、

「あらっ」

と。そして見て、

「やっ、これはカッケロー虫ではねえ。人だ」

って、叫んだんだって、逃げた鬼に。
「戻って来い。カッケロー虫じゃねえよぉ。人だよぉ」
って。そしたら、皆 また戻って来て、
「いや、このじい。昨晩も 声してわいらだまして、小判やなんかとったな」
って。
「ちがう、ちがう」
って言っても、それ ゆくてねえ（ろくでなし） おじいさんだって。そておじいさんを殺して食べてしまったんだと。したらか（だから？） 人の話を聞いて欲張るなよって。
どっとはらい。

屁たれ嫁

（槍沢）

嫁っこ に行って、あんまり屁たれて屁たれて、ほだされて。荷物みんな持ってほだされてきたら、殿様の行列、会ったって。殿様の行列に、
「やっ、どうしたのだ」
って聞かれて、
「こういうわあけで あんまり屁たれて、ほだされるところだ」
って。
「いや、そったねえ屁たれるのを聞いたことはねえ。屁たれてみろ」
って言うんだって。殿様が。したらほれ、その嫁さんが、
「いや、したら今屁たれるから、そこら辺さ、皆つかまってけろ」
って。さ、そっからこんだ屁たれて屁たれて、皆飛ばされるだけ屁たれたんだと。それで殿様が、
「やめてけろ、やめてけろ。飛ばされるからやめてけろ。ほうびけるから やめてけろ」
って。そして、屁たれるのをやめて、ほうび、そこでいっ

ぱいもらったら、ほだす人が、
「いや、こったにほうびもらった嫁ば、やっぱりほだされね」
って。そして、またもらいかえして　戻っていったって。

おむすびころりん　　（沼沢）

ネズミの穴っこさ、お昼になって御飯食べる気になって、おにぎり出して食べる気になってたら、おにぎりをこぼして コロコロと ころんでいったら、ネズミの穴っこさ入っていったとかなす。
そして、そのおにぎりの あとっこ、ぼっていって おにぎりとる気で、その穴っこの中さ入っていったら・・・

おむすびころりん　　（鳥沼新田）

おじいさんとおばあさんがあったずな。おじいさんが、山さ まきとりに行って お昼になったから、お握り食べるべしっていって もって出したら、土にねずみの穴だったべな。そこさお握りころんでいったらす。
で、入っていったすけ、まだもってらないでたって。だら、
「お握り スットントン」
って、中で言ったってはぁ、皆 けて（くれて）しまったずって。

屁たれ嫁　　（鳥沼新田）

あまりおならするから、お尻さネジしたって。ネジかっていたら、今度は、ドンとつけたネジ出て、どろぼうが、

せっかく荷物持ったのを、おいて逃げたって。屁ったれ嫁が 手柄たてたって。

長い話

（鳥沼新田）

穴からヘビが出てんだよ。チョロチョロ、チョロチョロと、どこまでも出るって。あきてしまって どっとはらい。

継子話（ままこ）（子安様になった継母（ままはは））

（北向）

むかし、大工さんがあったてな。あったったじって。そしたらほれ、嫁さんが人がなくなって そして、子供さんが一人あって、大工さんだから、ほれ、どこでも外に出て働いているんでしょう。

そしたらほれ、あのー、その継母が、そして お弁当を作って、あのタカ子という先妻の子供が一人いて、タケ子という後妻の子供があってね。そしてよく あの弁当を作って持たせるに、先妻の子供には右におかずを拾って、自分の子供には左に入れて、そしておかずを持たせたってな。

そして、後妻の子供は とってもよくって、先妻の子供におかずをみんな投げさせてね、そしてほら、自分のおかずを与えてね。（継母は）悪いのばっかり先妻の子供には持たせたそうです。後妻の子供がみな捨てさせてほれ、それまでも ずっと続いたらしくて。あのー、でも後妻の子供は、利口でほれ、自分でそれをかばって、あのいたそうですけれど、いたらしいけれど。

あるときに、あの二人のタカ子とタケ子の二人で、作って持たせたおかずをね、先妻の子供に作ったおかずを後妻の子供が食べたそうです。自分で好んでな。そしたらほれ、毒が入っておってね。そしてほれ、自分の子供が死んだん

でしょう。そして（継母が）泣きわめいて、まず、あのー、発狂するみたいになったす。
そしてほれ、悲しんで そしたら 継母が悲しみに酔って、あの気持ちを改心してね。あの子安様になったってね。
子供を守るあの神様にね、なったてな。

蛇むこ入り

（北向）

ある部落に娘さんが一人あって、三人暮らしてたって。農家で田んぼもいっぱいやっておって、ほんで 父親が田んぼの水の見回りにいってたって。干ばつの年で、水が足りなくて、
「困った。困った」
と言うておるとね、そしたらほれ、田んぼのほとりに大きな蛇がいてね。そしてその父親に、
「水のことだら、私が心配なく かけてあげるから、そちらの娘を私にください」
といったそうです。そしたらほれ、さっそく うけたまわって、そしてうちに帰って娘さんにお話したそうです。
世にもめずらしい蛇なんかに お嫁さんに行くのを、泣いたり嘆いたりするんだろうと父親が心配して、ようようの次第でお話したんだってね。そしたら 娘さんが さっそく承知して、
「あやははの、つらかんぼが心配なく実るようになれば、それでよいて。そのかわり、お嫁に行くとき、一つだけ条件がある」
って言ったそうな。そしてお嫁に行く日がきて、千本の針を持って、お嫁さんに行ったそうです。
そしたら今度は、千本の針を あるものの上に刺して、その上に蛇を寝かしたそうです。そしたら その蛇も、いくら強い蛇でも 針にはかなわなくて、蛇の命をとってね。そしてその娘さんは、また無事にうちにもどったって。

うりこひめこ　　（北向）

じじとばばがあったじょんせ。わらしと暮らしていたっきゃ。

（ある日）、菜畑さ行って、ちゅうりく（瓜？）もいできて 戸棚さ かこっておいてくんてえとおもったっきゃ。ほだ、女のわらしゃ 生まれててな。わらしゃ いっときまに ずんずんずんずんと大きくなって、そして、はた織るようになって、畑さ あがって機（はた）織って、

「織ったら じじに着せるにい。織ったら ばばに着せるにい」

と、はた織って出来たのを ばばに着せて、余れば じじさ町さ売りに行って、お金とって生活して、いっときまに 金持ちになったたじって。

ある日、いっぱいお金を（布を）町さもっていって、お金をとってくるんだって。うりひめこが じじを戸来（へらい村のこと）町へやったんだってな。ばばと二人になったうちに、いっぱいしょうて行ったんだって。そして、うちを出るとき、

「うりひめくぁい、うりひめくぁい。だぁへ（だれも）もなあ、戸を開けちゃなんねェ」

って言っていったんだって。

「うりひめこ、戸を開けろ」

ひっぺい ひるひとが ひるものがあってな。

「戸を開けんば、じじに叱られる。おら開けね」

開ければ、じじに叱られる って言うて開けねえ言ったずんども、そしたきゃ、ほれ、戸を破って入って、うりひめこよ、機（はた）からひきずりおとして、殺して外さひきずっていって茅（かや）の根に うりひめこをかくまった（埋めた？）って。今では、すすきの根が赤いのは、うりひめこの血で染まったのがね、今でも赤くでている。

馬鹿むこ

（北向）

次郎っていう馬鹿者が、ある村にあってね、そしてほれ、おむこさんにもらいに さっそくほれ、働き者でねえ。ほれあの良く働いて 皆の信用を得ていたったけれどもね。そいでほら、家にも帰ってみたいということで、道がほれ、今度は、自分の家へ行く道が 忘れたって言ったんだって。自分の生まれた家へ帰る道が。

そしたら、家の父さんが、

「私が 先にたって行くから、あとからそのあとを、こう見て糠(ぬか)のまいた所を行けば 家につくから、糠を見て行きなさい」

ってことで言ったてね。

そしたら その次郎さんは、あのずーっと糠のまいた所を行ったけれどもね、風がこう吹いて糠が川の方へ飛んだらしくてね。そしたらそれ、川に糠が入ったら、その次郎さんも川へ入ったらね、そのままおぼれてね、亡くなったんだって。

食わず女房

（北向）

あの、物のない時代でそうだったかと思いますけど、おらほに、物食べない嫁さん欲しい、物食べない嫁さん欲しいて、言っていたそうです。そしたら ある晩に、

「私は物たべない人だから、嫁さんにしてください」

って来たってね。自分が望んでいた嫁さんだ と思ったんだべ。さっそくほれ、嫁さんにしたのさ。

そしたら、皆で食べるときには絶対食べなかったそうです。そして、食べないで働くから不思議に思ったんでな。自分で望んでもね。

そして、夜にこっそり起きてみたんだって。そしたら、大っきい釜で御飯を炊いて、こうかかえて、クボ(クモ)は口が頭

にあるでしょ。そして釜で御飯を全部食べてね。そうしていたったそうです。そしたら、びっくりしたんでしょ。それにクボの嫁さんも気が付いたんでしょ。見られたと思って、そしてほれ、追われて追われて だめだと思ったんだって。

そしたら、ある湿地の所に行ったらね。ヨモギと菖蒲がじゃんぐり育っていたんだってな。そこへほれ、隠れたんだってな。そしたらクボの嫁さんがね、そこに入ることができなかったんだって。

だからね、五月の節句には、菖蒲とヨモギを屋根にね、お守りにやるんだけれども。

箱の中にガマのいた話

（北向）

乞食（こじき）が、今は福祉社会になっているから 乞食もないわけだけど、昔は、よく乞食がまわりましたったの。

そして、欲張りだったのか 乞食が来たのに、け（あげよう）ろと思ったのをためておいてね、ほらほら たいした たまるだろうと思って 乞食にはあげないで、その分だけ ずっと箱の中にためておいたの。

ああ、もうたまっているだろうなあ、と思ってあの箱を開けてみたら、あの、ガマがいたったの。

桃太郎

（山田）

おばあさんが 川へ洗たくへ行って 洗たくしてたら、桃が流れてきたって。

その桃を拾って うちさ持ってきて、おじいさんが 山さたき木とりに行って戻ってきたら食べようと思って、ほい（包丁）じょうたてたら、赤ちゃんが生まれたって。

だんだん大きくなって鬼退治したって。そこの村では、鬼ぁ 作物をあらして、鬼ぁ ではって、何もかも困ってたとこ、桃太郎が大きくなって鬼退治しては、作物あらさなくなったと。

田っこ 作り　　（山田）

米っこ食いたいって、昔じゃあ いったったじゃって。
米っこ食いたけりゃ、田っこ作れって。
田っこ作れば どろがつくって。
どろがついたら 川さ入(はい)れって。
川さ入れば 流れるって。
流れたら芦(あし)さ とっつかまれって。
芦さ とっつかまれば 手は切れるって。
手は切れたら とどのこっこ(香) 撒(ま)けって。
とどのこっこ 撒けば ハエやつくって。
ハエやついたら ハギ(ほうき)で はきなさいよ。
おわり。どっとはらい。

【※】以下の部分が付いて繰り返されることもある。
「ハギで はけば 血がつく。血がついたら 川さ入れ・・・」

田っこ作り　　（太田）

昔あったじぁ。
昔のわらしは、米っこかみてえ 米っこかみてえっったじぁ。
米っこかみたければ田っこ作れ。
田っこ作れば足さよごれる。
足ぁよごれたら川さへえれ。
川さへえれば流れる。

流れればよしさとっつかまれ。
よしさとっつかまれば手が切れる。
手が切れたらとどのここつけろ。
とどのここつければハエがたかる。
ハエがたかったら、これで、どっとはらいだ。

うそつきの話

（太田）

昔あったじぁ。秋田にほんとの おそし（うそつき？） あったじぁ。そのおそし、
「南部の方にも おそし あるじから（いるから？）、これと手合わせしてみたい」
と思って、来たじぁ。来て、
「どこだべな、そのおそし あるところは」
って言ったっきゃ。
「その家だ」
って教えて、いったきゃ、誰もいねえ。わらしが・・・そのわらしさ、
「あや、どっちさいった」
って言ったら、
「あや、きんな（きのう）、風ふいて、（・・・聴き取れず・・・）のようになったので、線香三本たなって、つっかえ棒にして もっていったぞぉん」
「んだら、あっぱ（母さん）、どっちさいった」
「あっぱ、こがら沼で洗たくしたっきゃ、水がでなくなって、じゃあ今度は、海から水くんで（・・・聴き取れず・・・）と思って・・・」
「いやこのガキは、てえへんなガキだ」
と思って、
「いや、オラん方で、実は 大きな寺あって、その寺にたまげた大きい つり鐘あって、そのつり ゴーンとつけば・・・そのつり鐘、きんな（きのう）の風で飛んでって、山こえて、南部の

方さ飛んできたんで、それ、さがじ(さがしに)にきたんだ。こっちこなかったべかな」
そしたら わらしは、
「今朝(けさ)、起きたっきゃ、家のめえの柿の木さ ぶらさがってた」
「いや、これは てえへんなもんだ。こったらもんだら、おやじは（・・・聴き取れず・・・）」
と思って、はあ、おっぱげて(とても驚いて)、秋田さ 逃げていったじぉん。
はぁ、どっとはらい。

梅こ 花こ　　（太田）

あとからの母が、花こを殺したくて、梅こと話したと。
このうちさ（・・・聴き取れず・・・）こんだ二階から短刀おとしたと。ほんだ、朝まで はあ 死んでたと思って。
ほれ、母が見にいったっきゃ、ほの、梅こが花こをかばって、
「こっちさ寝ろ。今、お母さんが短刀おとすちけ、刀おとすちけ、こっちさ寝ろ」
って。ほうやって、見にいったっきゃ、死んだもんだと思って、母きてみたっきゃ、ほれ、
「まま食え、梅こ、まま食え」
って、へえったっきゃ、二人そろって、ちょろちょろ出たもんで、
「どうやってこりゃ、殺してええが」
と思って、かんじょうしたと。
今度は、ここで、おやじは ばくろで、ばくろしにゃあっていったっじ。ほの、いねえところで、花こを殺してえと思って。
今度は、毒へっだ(はいった)飯にぎって、学校さ持たせてやったと。
「こっちば花こ、こっちば梅こ」
って。これを、

「こっちば食うな。こっちば 花このんだ(のだ)」
って、(梅こに) こう言って、持たせてやったじ。これを、こっだ 梅こが、
「花こ、このまま なげろ」
って、なげたっきゃ、犬っこが拾って食ったど。そこではあ、犬はポロっと死んだと。こんだ、梅このまま(ごはん)、二人でわけて食べて、家さ来たっきゃ、ほれ、ちょろっとまたきたみし。
「いや、どうやったらいかんべな。どうやって殺したらいかんべな」
と思って、かんじょうしたっきゃ、大工にたのんで、箱こせえて、ほの、なげるんだ。それさへえって、こっだ 梅こな、ままにぎって箱さ、こさえたのさへえって、花の種っこ、いっぱい買って、いくとこさ、穴っこ あけてもらったすけに、このいく道さ、花っこをまいてけって、かって、ほれ(・・・聴き取れず・・・)とうとう、花こは 箱さいれて、どっちさいったんだが、野原の方さいったんだがな。

ほっで、まず、いけられてたっきゃ(・・・聴き取れず・・・)。コウシンコウつうんがな、花が咲いたと。その花をたどって、梅こいった。ほっで、こった、もりこ立って、これだなと思って、
「花こー、花こ」
って、さけんだっきゃ、なんとなく、そこからきけたど。ああ、一生懸命土よけてたら、カラスきたと。箱だしたっきゃ、カラスきて、そのカラスが くちでぬいてくれたと。
「花こー、花こ」
ったっきゃ、ではったと。そうやってこんど泣いてな、
「家さ いがながべし、旅さいくべし」
つうので、旅、こっだ 二人で旅さではってったど。
たっきゃ、村さいったっきゃ、おやじ めくら(盲目)になっていたど。こっだ、おぼえていたんだべ。子どもがな。そっで、
「おっとさん」
って、かたっぽの手さ ぴたっとと、つかまったっさゃ、かたっぽの目が見えたど。そやって、両方さ とっつかまって、

二人で、両方さ とっつかまったっきゃ、びらんとほれ、子どもの顔が見えたって。そして、

「もうお父さん、もうおら、いかねえ、うちさ いかねえすけや」

こっだ、金持ちの良いうちさ、つかわれに はいったど。

そしたら こっどは、部屋ひとつ別にしてな。そして、晩げさなれば、ちゃんと着がえればよ、きれいな娘だと。そしたら、そこの若旦那、これを節穴っこからこうやって、見々(みいみい)してたと。

「いや、きれいなもんだ」

っていって、なっだ。こんだ、夜が明ければ かへぐとき、きたねえの着て、ボロボロなの着て、

「なんたって、これをお嫁さんにほしい」

って。へやった。

「こっだら 嫁をもらわなくてもいかんべえ」

っていったって、

「なんたって、見てる女にすけ、ほしい」

って。

そうやって、とうとう、そこのお嫁さんになって、幸福にくらしたと。

馬鹿むこ

（太田）

しゅうど礼って、しゅうどのとこさ行ったら、あまり、なんでもしねえんだとか、して、そのむこ(婿)は、なんでも もの食べたら、ごはんのあとにお湯飲むとき、あんまりフーフーってふっつけねえで、大根、あのつけものを、おかず出たら、それ大根でもひとつくらい入れて、こう、かまして飲めば、さめんだからって。

ある日、寒いとき、またしゅうどのとこさ行ったっきゃ、足洗えって、たらいさ、湯くんでだした。ところが、あまり熱くて、こりゃあ、あの大根づけ入れて、そして、大根

づけくれって。そして、大根づけもらって、たらいさ、かまして、さめたって。

海を見たことのない夫婦の話　（太田）

昔あったじぁ。昔、あや（父さん）とあっぱ（母さん）と、海見たことねえ。あやとあっぱといて、八戸（はちのへ）さ行くって、にぎり飯、腰さ さげて、行ったぞおん。歩ってったっきゃ、歩ってったっきゃ、八戸の入り口まで、行ったぞおん。

入り口さ行ったっきゃき、つづみさ、春先で 水いっぱいたまっていたぞおん。あっぱ それ見て、

「あや、これは海だべか、これは海だべか」

って言ったぞおん。そしたっきゃ、あや、

「はずかしい、だまって歩け、他の人に はずかしいんだ。海はこの三倍もあるだけ、大きいんだ」

って言ったぞおん。

どっとはらい。

長い話 ①　（太田）

だけの穴からヘビが出はったぞおん。そのヘビが出はってって、いや長くて長くて、どこまでだ・・・八戸さいっても、海の方さ行っても、まぁだ、・・・で、長く、長い話だって。

花咲かじじい　（太田）

正直なおじいさんが犬を飼って 預かっておいたら、その

おじいさんを引っぱって、

「ここ掘れワンワンワンワン」

て、裏の畑を掘ったら、大判小判がざっくざくと出たてなす。そったら こんだ、隣のおばあさんがそれを聞いて、うちのおじいさんに犬っこ かしてくださいて。

その犬をかしてやったら、その犬は、掘れと さかばない。なかないのを そこを掘ったら、茶わん欠けたのや 瀬戸物やら 瓦(かわら)の欠けやら いっぱい出てきて、そのおじいさんが腹を立てて、その犬を殺したてね。

で、埋めたとこさ、今度はほれ、正直なおじいさんが木を植えたら、その木が大きくなって、そてこた、それを臼にほって、臼で餅をついたら、また大判小判がいっぱい出たって。

たら また、隣のおじいさんも またその臼をかりて行って餅ついたら、今度は、ほれまた瓦や瀬戸物なんか みんな出て来て、たら おじいさんが腹立てて、その臼 燃やしてみんな灰になったそうです。たら、正直なおじいさんが、

「やあ もったいない。あんな臼をこんなに灰にしてしまって」

て、枯木(かれき)さ あがってまいたら、枯木に花が咲いたって。したら、殿様がそこを通って殿様が、

「まあー、きれいだとこ。こんな枯木に きれいによく花が咲いた」

ってほうびくれたって。

たら また悪い隣のおじいさんが 灰をもらって、また枯木さ あがってまいたら、殿様がそこを通ってたら、殿様の目の中さ灰が入って、そのおじいさんが とうとう牢屋さつれてかれたって。

かちかち山

（太田）

ウサギとタヌキが薪取りに行ってね。薪タヌキが先になって ウサギがあとについて来たの。

で、マッチつけるんで、ほれカチカチとやったら、

「ここはなんだか、カチカチと音がする。なんですか」

って言ったら、

「ここはカチカチ山だ」

って。そして背中の薪に火がついて ボウボウといったら、

「ここはボウボウ山という」

って。そうしてるうちに、みな火傷（やけど）してしまったと。

ネズミの嫁入り

（太田）

ネズミの庄屋さんが いい娘さんを持って、一番偉い人に自分の娘をくれたいって、みなネズミ達を集めて相談したって。したら、ある物知りのネズミが、

「ネズミ 誰にくれたって、お日様が一番偉いんでねえか。お日様出れば、みんなあったかくなるし、いんではないか」

と言ったら、

「いや、お日様より雲だ。お日様を隠すのは雲だ」

って。

「雲より強いのは風だ」

「風より強いのは壁ではねっか。壁を塗れば、ほれ 風が通らぬ」

「その壁に穴あけるのは、ネズミだ。だからネズミくらい偉いものはない」

って。そして、ネズミの娘さんを とうとう またネズミにくれたと。

きつねの嫁入り

（太田）

むかし、若いものが 山に行って炭焼きなんかしてると、そこをそれ、きれぇな女がとおって歩くって。

そして あんまりきれいな女で、その人 夫婦になったところが、そのお嫁さんが よく機織(はた)りして、機を織って、そして街(まち)へ持って行って、その布を売ってきて、その夫を養っていたら 子供が出(でき)て。

その子供育てて、そして機を織っているうちに、こんどはあんまり眠くなって、きつねが眠ってしまったら子供が泣いて、見たところ、障子の影が きつねの姿になってしまっていて、そして、それを子供に見られたから、とてもいることができないって。

そして、きつねは いなくなったと。

和尚と小坊

（太田）

（一）

和尚さんが小坊さんたちに 御飯をろくに食べさせないから、小坊さんたちが集まって、和尚さんのお帰りを待って 門の上にあがっていて、

「和尚、小坊に いちぜんぜんしこ 食べさせてるなっ」

「ハイハイ」

って。

「これからは、いっぱい食べさせなさいよっ」

て言ったと。

（二）

とんちな小坊さんが、和尚さんが飴(あめ)を瓶(かめ)さ いっぺえ買っておいて ひとりでなめてて、

「私がよそへ出ていってくるから、この飴をなめると、年のとった人がいいけど、若い人が食べれば死ぬから、絶対

これ食べてはなんない」
って、和尚さんがしまっておいたの。したら こんた、小坊さんたちが集まって、
「和尚さんが食べて死なぬものなんで、私らだって食べたって なんでもないんだ」
って、みんな よりたかって みんな食べてしまって、そうして 和尚さんの帰りを待っていて、和尚さんが帰った。
「ほんで和尚さん、どうも悪いことをしましたから」
っておわびしたら、和尚さんが、
「何やったの」
って言うたら、
「和尚さんの毎日なめている飴の瓶をこわしてしまいましたから、どうぞお許しください」
って。
「和尚さんがこれをなめると死ぬっていうたらから、死んでおわびすると思って、和尚さんの帰りを待ってました」
って。

鬼のばくち

（太田）

ばくちやってるところにおじいさんが行って、
「もう夜が明けそうだ」
って、鬼たちが言ったら、
「カッケッコー」
ってゆったら、鬼たちが お金をいっぱいおいて 逃げていって、そのお金を持ってきて、よいおじいさんが いっぱいお金持ちになったって。その真似をしたおじいさんが、
「カッケッコー」
ってゆったら、
「さあ夜が明ける、二番鶏だ、三番鶏だ、帰らねばなんねえ」
ってゆったら、お金 おいたから あんまり面白くて笑ったって。笑ったら、これ鬼たちが、
「鶏(とり)でねえ、人だ」
って。鬼にそのおじいさんは連れて行かれたって。

長い話②

（太田）

大きいヘビがあって、ヘビが顔を出して ジトジト町まで
いっても 尾つぱ(尾っぽ)が ではないで、海までいってもずっとず
っと出てきたよ。どっとはらい。

桃太郎

（太田）

むかしあったじゃぁ。おっきい桃が ダケ(？)から流れてきた
んだって。どんぶらこ どんぶらこ と流れてきて、爺(じい)ちゃ
ん 山さ たきぎとりに行ったんです。
婆(ばば)、川さ あわしに いったんだば、桃ぁ流れてきて、
「こっちゃ寄れ」
ったば、婆、ほうさ寄ってきて、その桃さ拾ってきて、戸
だなさ かこっておいて、爺ちゃん山から来たのさ。
「爺ちゃん、爺ちゃん、桃っこ拾ってきてら。腹へったん
べ、食うべゃ」
って戸だな開けたんば、桃っこ、二つにわれて赤ちゃんが
生まれてあったぁずって。
「ヤーヤー、赤ん坊生まれてら、生まれてら」
って。そんで、爺(じじ)と婆(ばば)として赤ちゃんを戸だなから出して、
おがらかした(育てた) ずって。
そしたら、大きくなって大きくなって、ダケさ行って鬼
退治に行くって。
「いやいや、鬼退治にもなんもいかねえんだ（行くな）。
鬼に、かれんだ（食われてしまうから）いかねんだ」
「鬼にかれんだ、いかねんだってもなんもかれねえ。鬼お
さえてきてける」
って。鬼退治にダケさ行ったって。鬼おさえてきたずって。
どっとはらい。

うそつきの話

（牧内（まきない））

ある子どもだわな。うその上手な子どもがあったわな。ねえことを話したり、作り話のうそをついたり、毎日、そこらじゅう、うそをついては困らせている人があったそうな。今日もだます。明日もだます。だますのを楽しみにしているな、子どもだった。

あるとき、山さ（仲間で）いったそうな。そしてうそをつくのには、オオカミに出会ったとな。

「オオカミが来た」

と逃げたども、そしたら いつもうそをついているから（仲間は）、

「あらは、またうそだ」

と。それでよ、相手にされんで 知らんふりしとる。

そしてたら、本当にオオカミが出て、かみつかれたって。そのときには、本当のことも、うそと、だれも相手にしないって、うそしちゃいけねえって。

どっとはらい。

ネズとカエル

（牧内）

ある小川に 悪いコンビさ友達になって、死ななくてもいいだに死んだんだな。

どうつうかくええば、ネズ（ネズミ）とカエルが仲良しになった。まったくおかはじくんくん、水はじくんくん仲だ。

良くなるはずねえども、悪いのと、悪いのと、うまくなって（・・・聴き取れず・・・）川さ水はいって、（・・・聴き取れず・・・）だまされて泳いだった。

そしたらタカが来た。さあ、カエルさ、水さもぐっていけんども、ネズさ もぐれない。タカさ つかまったって。とっつかまりたくならないば、おぼれる。そうじゃなかったらタカに会う。（・・・聴き取れず・・・）そこを捕えて

（・・・聴き取れず・・・）悪いのと友達になったために
そう（・・・聴き取れず・・・）

きつねの三味線弾き

（宮台）

きつねが化けて、やって来るわけですな 家に。そして、歌を歌って、太鼓、三味線で、そのひとりの女の方は、踊って、男の方のふたりは、太鼓と三味線。

そのお話 ずーっと聞いていって最後は、三味線は それ、山にあるアケビのツルとかね、太鼓は 面白えんだこれ、お魚の皮かなんか 何かに こう張った、そういうのを たたいて、まわってきて、最後に ほれ、どうしてもあんまり調子がいいんで、その辺の子供らが 寄ってよく見たら、きつねのしっぽが見えたと言うんだ。

「あっ、これはきつねだ」

というので大きな声を出したら、いっぺんにそれ、走ってどこかへか 隠れたか、はぐれてしまったと。

鬼の賭博（とばく）

（宮台）

ここにお宮があるでしょ。ここのお宮で賭博が始まったの。そのとばくが毎晩、賭博やるので困ってしまって、ちょうどうちの部落がここに近いから、その賭博の連中を捕まえようと思ってね。

そっとある晩、あのお宮の天井裏に忍び込んで隠れていたわけ。そしたら、赤鬼、青鬼、角（つの）は一本ある。口は耳のほうまで割れた鬼、そういう鬼が たぁくさん集まって、そして賭博を始めたもんだから、忍び込んだそのライゴ（？）ウ様、恐れたわけだ。

「こりゃ私、もし この存在がわかったら ひとっつかみ

だ」
食べられると思って、まず息をのんで隠れて、さかんとやっている間に ブーッとほれ、やったわけだ、あまり緊張したから。そしたら、鬼の連中が、
「まてっ」
というわけで、そのへん物色しても すぐ出てこないから、黙ってたわけだ。それがおかしくて ククーッと笑ったらしいんだね ライゴウが。そしたら、
「ほらー、笑い虫が出たー」
というわけで、お金なんか全部おいて、全部逃げてしまった。それを隣の若いのが真似をして、ほれ 大将がたくさんお金 あれしたもんだから。それを真似して行ったの。それが捕まって食べられてるんですよ。
　というのは、調子よく出てこないんだろうし、笑うのもさっぱり緊張して おかしくはないから ゴソゴソして、今度は、わかられて すぐそこで殺されたと。
　人の真似は、絶対するもんでねえと教わったもんです。

歌う骸骨（がいこつ）

（宮台）

　三人で出稼ぎに行って、坪という所で おちあって来たら、ひとりが たんまり金、あとは 二人は 全然弁当銭もないぐらいで、それが今度は（たんまり持った男が）殺されるわけだ。そして、そのたんまり持った金を二人で分けて、そして威張って家へ来るわけだ。さ、ま、それは それでその年は成功して、
「いや、おらの帰って来ない。一緒に行ったんだが、どうしたか」
って聞かれるわけですよ。ところが、
「いや、坪（地名）までは 一緒に来たけれども、そこでわかれた。もう少し働かなければ、家へ帰れないというので、また ほれ 逆に帰ってしまった」
こういう嘘（うそ）してるわけです。
　何年か後だろうけれども、その死んだのの 残ったコウベ（シャレコウベ）が、あるときに、その殺した連中が出稼ぎに行っ

たときに、その彼をやっつけたところの場所へ来たら、とてもきれいな声で歌を歌っていたんだと。あまりきれいな声で不思議で その辺 物色してたずねたら、きれいなカラカサ松の上にコウベがあって、それが歌っていた。

ところが、そのコウベが歌っているやつのは、とても立派な歌、いい声で、今度は またそのコウベをとって、コウベだってわかると困るから、ある何かにくるんで、ひっかついでほれ、歩いてほうぼうまわって、大変な お金をまず二人でとったわけだ。ところが、それが殿様の耳に入って、

「いや、そんなことがあるはずがない。いや、それを俺も聞きたい」

ということで、殿様の御用がかかったわけ。

「いやっこれだ、こうなったら お金どころではない、国をもらえる領地をもらえる」

と。もうすでに欲が出てきてるから。そして、ほれ呼び出されて いついつか お城へ来いと。そしてお城へのぼって、いや 侍はたくさんいる、大衆の前でほれ、

「ひとつ、花笠音頭やれ」

と、こうやれば、いやとてもその包みの中からいい声がして出てくるんだと。二、三歌ったら最後に、

「ちょっと よおく聞いてくれ」

と。

「私はこういう過去で、こういうことで 今ここに連れて来られた。この二人は、大変な殺人を犯しているんだ」

それをはっきりと殿様の前で申し上げたそうだ。

そしたら すぐに はっつかまったんでしょう。そういうことをするとすぐに殿様の御用にかかって、打ち首になるから。絶対にそういうことはしてはならんと。

屁ひり女房

（宮台）

むかしあったじな。ある所に、きれいな息子さんがあってね。その付近のないような 一番きれいな娘さんを嫁さんにもらおうと思って、ずい分探して見つけたのが、大きなおならをする それにあたったんだと。

その嫁さんは、山を超えてむこうから来たかたで、あんまりおならが大きいので 離婚されて、その家のむこさんと、隣の旦那さん頼んで そうして三人で ヒマをおくるわけだ。嫁さんをおくって、野原で牛方のかたがたに あったわけだ。その嫁さんが、

「いや、きれいなおねえちゃんだ。あんたがた どこへ行くとこだ」

と、こう聞かれたところで、

「いや、しかじかこういう事情で、今 ほら うしろの村へおくってくところだ」

「そんなバカな話はない」

家でブッとやったのが、おばあさんがそれに飛ばされて、とびあがってケガさせてしまったから、おくり出されるわけだ。それだもんだから、片方の連中は、

「そんなバカな話はない。いくらおならが大きいったってほれ、人間をとび上げるような おなら、あるはずがない」

と、こういうので、

「いやいや とてもあんたが 想像もなんも出来るもんでねえ。まず こんなきれいな娘さんで、体も小さいけれども、おならだけは、まず大砲以上だ」

と、こう お話したわけだ。

「いや、我々は信じないけれども、どこまでもあんたがたがそう言うのなら、いっぺん ここで試してもらえねえか」って、こういうことなんだ。

試すったって、これだけは、だんだん生理的に体の調子から出てくるので、そう簡単に出てこない。いやどうしたら出る、こうしたら出るって、言っているうちに だんだんやる気になったらしいの、この嫁さんが。

「いや それじゃあまず、なんか体の調子もそういうふうな調子だし、あんたがた少し、あんまりそばへ来ないで、離れて」

「そんなバカな話しゃあねえ。俺なんか 飛ばされてどこへ行ってもいいから、まず それが出来たらやってくれ。もしやって見せてくれたって、タダではうまくねえだろうから、牛につんできた荷物 ひとはずな分はあげるから 見せてくれ」

「とにかく よけなさい」

というわけで、ずっとよけて、まず 笑いながらよけてはくれたらしいが、その嫁さん そこでお尻たくってやるわけにもいかないし、じゃあすぐそこに松のでっかい木があったんだって。そのかげでやるから。

そこで、それその大きな松の根もとへしゃがんで、一発やったらしいの。そしたらねえ、その松の木がパーッと倒れてしまって、ジャーとそこへ爆弾がおちたみたいに土がとんで、松の木も とんでもないほうさ、二回転も三回転もひっくり返っていったんだって。いや そこらにいた土方の連中なんか、牛は牛でウァーと逃げ歩く、人間もその辺にいなかったんだって。

「さあ、あねさん 大変なことをした」

隣の人は、

「これでは 殿様に連れていかれて、しばり首だぞ」

って。大変だって心配したわけだ。そしたら ほれ 牛方の親方が、

「いやいやはじめてだ。これなば(?)は、この牛みなやってもいいけれども、約束は約束だから。あげると同時に私、おくってゆくから」

そしたところで、今度はむこさんが、

「こんなことがあるなら、おくるよりも、もういっぺん家へ帰さなけりゃならん」

と。こういうので隣の旦那様、

「いやいやどうなったって、家へ連れてゆけば またしかられるし、あとでどんなことになるかわからないから、お

くって行こう行こう」

でも、むこさんが無理に頼んで、また家へもどって来たのです。そうしたら その家が大変な そういういろいろな宝ものを手に入れて、大変な長者になって 末永く栄えたと。

だから、おならをするときは、フーとやらないで、大きなおならをしなさいと。

どっとはらい。

絵猫とネズミ

（宮台）

学校さ行っても猫ばかりかいている子供が、その猫かいて 家から勘当されて ずっと泊まるところがなくて、どっかのお寺行って泊まって、そこのお寺で いろいろ世話になったから、何にもお礼もないし、私 これしかできないからというので、そこの坊さんに猫の絵をかいて。

ところが和尚さん、当時の和尚さんというのは、学者が多いからね。

「これは小僧だけれども、この猫の絵は、とにかく ただもんじゃねえ。相当絵のかける人間だ」

と思って、その猫をからかみに貼っておいたらしいの。

で、その当時は 何にもなかったそうだけれども、そこのお寺で 時折、お化けがでるので、和尚さんさんも まずほれ、お化けが出るたんびに やっぱり苦労してるらしいの。

ところが、その猫がね、ある日に出たお化けをかみ殺して、そして そのお化けを殺して、また元のからかみに ぴたっと貼ってあるし。

朝、坊さんが起きてみたら、大きなネズミが 本堂のわきに死んでいたと。で、そのネズミが、かいた猫のために仇（かたき）をとられたと。

豆腐の好きな和尚

（宮台）

その和尚は、なんもかんもお豆腐好きで、お豆腐もお豆腐、田楽というのは、お味噌をつけて、こう 串へさして焼くんでしょう。あれを好きなので、そのにおいをかいで その小坊が お腹が痛くなったんだって、食べたくなって。

何かいいことがないかと思って思案の結果、よし わかったと。毎朝、あの和尚さんが その時間に便所いくから、で、それ、便所の板をずーっと切って落ちるばかりにしていたら、あの豆腐 たっくさんさして焼いてね、田楽を。途端に、

「小坊、おーい、便所に行ってくるから田楽をみてろ。ちゃんとほれ、こう 皆 うまくあんまりこがしちゃだめだし。みてなさい」

「はーい」

って言って、早く行けばいいなって 待ってたらしいの。

なんのかんの なかなか行かなかったんだけど、とうとうやっぱり いつも行く時間に行くわけだ。そしたらほれ、バリーン、ぼったと落ちたんだって。

「小坊ぉー、小坊ぉー」

って呼んだったって、

「はいー、はいー」

たって行かねで、自分は 半分位食べてしまったんだって。

長い話

（宮台）

そこの お宮をバックにして、お宮に 切った木の根に 熊が入るような洞穴があったんだって。それから、フワッと大蛇が口を開いて、火を吹き出して出てきたんだって。

さあ、出てきた出てきた、さあ、マラマラ出てきた。あと なかなか出てこない、おわりがこないんだもんね。それで長い話だと。

なまけ者と大黒様

（舘町）

むかし、まず、（・・・聴き取れず・・・）なにしろ、なんともその男は働きたくない。酒っこは飲みたい。毎日ほいってほれ、村にいている夫婦暮らしのなにかずだったずんだ。ところが、仕事は かせがねえで飲んでばかり。だんだんに うちは貧乏になってきてなぁ、それでたのんでこんどかかれてやぁ。

ほれ、ほんのなに、新山の観音様、大黒様祀ってるんだが頼んだんだ。大黒様の御縁日の日に、大黒様豆料理好きだって話したって、豆料理をたくさんこしらえてあげて、

「来年から ええように毎日を暮らせるように」

二人してその豆料理、その納豆だかなんだか 四十八色も豆の料理 がらっと こしらえて、そしてこんどは 神社して、新山の神様の だいで祭り やんだ。御神酒二升たてて。

四十八色もこしらえた豆料理、大黒様豆料理好きだそんだが、それでやっても来そうなかったんだ。九時になっても来ない。十時になっても来ない。腹くそ悪くなって飲んだぁな。その捧げと思っていた二升の酒、酒飲みだったか二升ずてっと飲んだ。ぐうかぐうかっつうのになったから飲んで、そして出かけたのは 新山さ行ったんだ。

「今まで新山の神様ってあがめていたったんで、拝んできたによ、わこたらに料理こしらえてきて、一口も食ってけねえじゃなか。神様も（・・・聴き取れず・・・）も縁をきるから」

なんだ腹たてて、そしてうんと神様の文句さ言って、神様よしこなして、そしたら神様、白装束で ひれなしてやってきて、

「せっかくのなんだから、ご馳走になりにいく」

って。それで神様と二人してきたら、こんどは 村はずれさはいったら、親子げんかしたわけなんだ。

「この家を三日も もっていけねなかんねえ・・・親子の縁をきる」

とかんだ。なんとはや、家の内、大騒動おきて。それで で

すね神様は、
「あの、今、話きいているのつらかった。だれたてさげすんでくれる、いちばんの」
「おめえは、豆の料理四十八色もこしらえて、私に御馳走し、こしらってくれたのはありがたいども、それより もっといい豆料理を御馳走になりてえもんだ」
それさ なんだかと思ったら、
「手さ豆さできるまで働いてけろ」
って いったんだって。
「手さ豆さできるまで働けば、これは一番の御馳走だ」
って。神様は、そして別れたんだって。
それからはもう、一生懸命働いて、又重(またしげ)の谷 をぐるっと田にしてしまった。働きもののことあった。
どっとはらい。

きつねにだまされた話①

（古川代(こがわしろ)）

昔むかしの ずっと昔の その昔、あるうちの裏山に、古い池があったそうです。そのうちのおじいさんが狩人で、鉄砲もって、裏山にでかけていった。池のほとりに立ってながめていたら、ちょうど池のほとりに立ってながめていたら、ちょうど池の向こうはしに、きつねが一匹うずくまって、すやすやと眠っていたそうです。
「よし、いいのがいた。きつねだ。ここで一発、ズドンとはなしてやろう」
と、的をめがけて、ズドーンとはなしたんです。
ところが、あたり一面、真っ暗になったそうです。これは、どっちさ行けばいいのか、どっちさ行けば うちさ帰れるんだか 全然方向もわからなくなって、唖然(あぜん)として立ってたそうです。ところが、ずっとむこうに、明るいともし火が見えたそうです。
「あっ、あそこだ。あそこさ行けば、なんか人がいるか、

なんか 人家があるか、なんかがある。あそこへ行きましょう」

というわけで、歩いて、沢があり、谷があり山があり、とにかく そのともし火をめがけて行ったそうです。

そしてずっと歩いて行ったら、そしたら そこに、古い くずやの、くずやってのは、わらぶきのね、くずやがあったそうです。そこへ行って、

「ごめんください、ごめんください」

「はい」

「実は私、狩人で、裏の池のほとりで、きつねを一発撃ったら、撃ったとたんに、きつねに当たったのかどうかはわかんないけんど、あたり一面真っ暗になって、どうしても行くあてがなくなって、ともし火をあてに来たんだ。どうか、今晩一晩だけ、ここに泊めてください」

とお願いしたそうです。ところが、そこから、女のおばあさんが出てきて、

「いや、泊めることはいいんですよ。泊めることはいいんだけれども、うちには今、うちのおじいさんが亡くなって、死んだということを、隣村に、いとこの方があるけれど、そこへ知らせに行きたいんだけれど、死んだ人 ひとりおいてけなくて、私は留守番をしている。あなた、ここにいて、留守番をしながら、ここで一晩なり、まずここへ泊まってください」

で、そこのおばあさんが隣村に行ったそうです。

そしてまず、こりゃどうも、死んだ人のところで、ひとり留守するのもなんとなくさみしいな という気持ちをもちながらも、自分が泊まる相手からも頼まれ、そしてまあ、うずくまって、炉端にいたそうです。

そしたら、炉端に、一匹の猫がいたそうです。猫が死んだ（人の入っている）棺おけさ、ぶっとはねてったそうです。ところが、少しあったら、その棺おけが、ブツンブツン鳴ってきたんです。

「おかしいな、こりゃ、死んだ人が入ってる棺おけが鳴るってのは不思議だな」

と思ったけれども、ひとまず がんばっていた。そうしているうちに、だんだんに、箱の音が大きくなって、それから死人が生き返って、そして白装束で、出てきて、そして炉ばたへ来て、お歯黒のつぼさきて、いっしょけんめいに歯をそめたそうです。そしてしばらくやって、そして、

「ついだがあ」

って。そしたら、おっかなくなって、びっくり仰天して、起き上がって。今もその方言が残ってますが、

〈死んだ棺おけのそばさ、猫をやっちゃだめですよ〉

ってのがあるんです。猫をやったので、死んだ人が生き返って、お歯黒つけて、

「ついたがあ」

って。(狩人は) とっても そこいらんないで いっしょけんめい逃げたそうです。どんどん逃げて、どこまでもいって、逃げたって。

ところが、あとを見たら、お葬式の鐘の音がして、チーンチーンて。南無阿弥陀仏の念仏が、だんだんに自分のあとを追ってきたような感じで、

「いや、おっかないな。どうして、自分が悪いことをしたわけでもないのに、自分のあとを追っかけてくるのは、不思議だな」

と、そう思いながらも、仕方ない、もう はあ 小走りにいったそうです。そうしたら、だんだんに葬式（の行列）の方が速くなって、だんだんに自分に近づいてきた。

「いや、こりゃたいへんだ」

と、仕方ない、そこさ大きな柳の木があったんですよ。

「よし、この柳の木さ登れば、葬式も この柳さは来るまい」

と柳の木さ、一生懸命あがって、

「まあ、ここならもう大丈夫だべ」

と思って、柳の木さあがって、一休みしていたら、ところがだんだんに葬式が来て、柳の木の根（元）さ、がんばこ（棺おけ）そこさ、いけたそうです。

「いや、これはおっかない」

と思って、

「仏さまが出てきたら、たい へんだ」

と思って、おっかなくて 身ぶるいしながらいたそうだ。ところがやはり、その、盛り土さ卒塔婆(そとば)たてるでしょ、そこがグーッと割れて、死人がまた ニューッと出てきて、だんだんに、木さ あがってきたって。あがって、あがって、あがって、あがって、自分さ近くまであがってきたって。

「なんのいわれでこうなったか。きつねに祟(たた)られたとは、このことかなあ」

と思って後悔したけど、

「仕方ない、これ以上あがれば落ちるし、仕方ない、度胸きめて柳の木に登った」

ところが、あいかわらず、死人があがってったそうだ。あがってって、自分さ、ほんとに はあ、近づくようになったんです。最後だから もうどうなってもいいと思って、もう少し 枝ピシッとやったら、バリーンと枝折れて、ドタッと下さ落ちたそうだ。ドタッと下さ落ちたら、ガラーッと、こっだ、お昼みたく明るくなって、その周辺に人がたくさんいて、

「やあー」

って、手うったそうだ。そばにいる連中には、仏さん死人もなんも見えねえもんで。その人が 鉄砲はなして、そのきつねを殺して、そのきつねが 沼の主(ぬし)だったんだかどうか、わからねえけんども。

そういう沼には、主とか、山には山の神とかあるんだそうだ。どっとはらい。

笑わぬ神様

（古川代）

あるところに、女の神様で 絶対今まで かつて笑ったことのない、現在もって笑うことを知らない神様がおりました。

「この神様を笑わせた者には、たくさんのほうびをやります」

というビラを九州全土に貼りだしたそうです。さあ九州全土、あらゆる神様がよって、その笑わない神様の前で、様々な面白い話やら いろいろなことをやっても(笑わない神様は) 絶対もう笑わなかったそうです。

ところで、これはどうしても笑わせないとしかたねえから、なんとかして笑わせてみたいというので、いろいろ考えた結果、再度また、大きなごほうびをやるから、ということで、舟をまわしたそうです。

そうしたら ある日のこと、小さな小犬が、ザルをかぶってきて、その女の神様の前で一生懸命踊ったそうです。犬がね、踊ったら、いつも笑うことを知らない女の神様が、いやあ、いっぺんに吹き出してしまって、もうはあ、笑いがとまらなかったって。

「いや、これは、なに、こんな犬が竹篭かぶってきて踊ったのを面白いと思うんだべなあ」

と。ほうびをたくさんやると言ったんだけど、何を犬にやったらいいんでしょう。

そのときまでは、犬の足は三本足だった。それで碁盤(ごばん)の脚(あし)は五本だった。今、四本でしょ。五本だったのが、ここに一本あまった脚があるから、それを犬にあげましょう。犬は三本足で不自由してるから、一本足をもらって、非常に便利がよくなって、山でも川でも(行ける)。はあ、喧嘩(けんか)もできる、なんでもかんでもできるようになったから、これ以上面白いことはないと。

犬もおもしろい、神様もまず、笑わせると言う念願が かなった、ということで、「笑」という字は、タケカンムリに犬でしょ。それから「笑」という字ができたそうです。

そのときから、碁盤の脚は四本になった。だから、今、犬がおしっこするのに片足あげるでしょ、あれは神様からもらった足だから、とっても もったいなくて、おしっこひっかけられないっていうんで、足あげるそうです。

【※】この話は話者が九州に旅行したときに、人から聞

いたものだそうです。

尻鳴りへら

（古川代）

又重（またじゅう）に新山（にいやま）神社があるね。ちょうどあの辺に、どっから迷い込んだか、一人の六部といいますか、巡礼みたいな、男の巡礼がお経をあげて、なんかもらって歩いたような方だと思いますが、その方がこう、歩いて、歩いて、歩いて、神社に夕方ついて、そこへ来て、トイレに行きたくなって。トイレっていっても、昔は神社にトイレはなかったので、

「こりゃあ、困ったなあ」

と思って、あたりをぐるっとまわって、トイレがないし、もう夕方だから、山かげに行って用をたしたそうだ。そして ちり紙もないし、あたりを見たら、小さい漆塗（うるしぬ）りのへらがあったそうで、

「あれがいい」

と、それで、自分のあれをぬぐったそうだ。ぬぐったら、ほれ、お尻が鳴ってきたそうです。どうなったかっていえば、

「ほっぽこ ほっぽこ、ほんでもねえだあ、さくらぐでんちゃあ さんがんがあ、あんきんこうに しんがりそう、しんがりそうに あんきんこう、うちぽらさって ぴゅっぴゅっ」

何回も繰り返し、繰り返して、

「ほっぽこほっぽこ、ほんでもねえだあ、さくらぐでんちゃあ さんがんがあ、あんきんこうに しんがりそう、しんがりそうに あんきんこう、うちぽらさって ぴゅっぴゅっ」

そうしたら、何しても、お尻が鳴って、

「こりゃ困ったなあ」

って。

「あのへらで、もう一ぺん こすってみるかな」

って裏返しにして、きゅっとまたこすったんだ。そしたら、

「ほっぽこ、ほっぽこ・・・」
って、鳴りが静まったそうだ。
「よし、これで金もうけしてやろう」
と言ったそうだ。
ある立派な邸宅のところで、お嬢さんがトイレさ行ったので、お嬢さんのお尻を、ぺっとへらでやったら、
「ほっぽこほっぽこ、ほんでもねえだあ、さくらぐでんちゃあ さんがんがあ、あんきんこうに しんがりそう、しんがりそうに あんきんこう、うちぼらさって ぴゅっぴゅっ」
って、鳴り始めたと。一日か二日たっても まだとまらない。そこで知らない顔して、
「話を聞いてきましたが、お嬢さんが お尻が鳴るっていう話ですが、治してあげたいと思って」
「いやいや、お前に治せるようなもんでないんだ。治したら、何万円でも、何十万でもあげよう」
「いやいや簡単に治してあげますよ」
「そだい言うんだったら、部屋に通せ」
と。そしてお嬢さんのお尻を こそっとやったら、
「ほっぽこ、ほっぽこ・・・」
と、止まったそうです。
「これは、お医者様でも治せなかったのに、よく治してくれました」
って、大きなほうびをもらったそうです。

【みちくさ（民話採訪雑記）】

倉石村のホタル　　民話調査担当者

どこまでも続く丘に、その真ん中を横切って流れている五戸川（ごのへ）。遠くの方には、八甲田の山々が姿をみせている。五戸川に沿って点々と集落があり、千葉のごみごみしたところからみると、まるで別天地のようにのどかな農村だ。

一年生の男子にとって、夏の調査には一つの試練がまっている。「肝試し（きもだめし）」・・・車で数分間とばして、そこでひとりずつ置き去りにするのである。

車からおろされたのは、ちょうど北向集落の入り口だった。じょっぱり精神を出して、田んぼの中を歩いて帰ろうとすると、やわらかい淡い光を放って浮揚するものがある。ホタルだ。よくみると、稲の葉にあぜ道にいっぱいいる。道は五戸川にぶつかってなくなってしまい、もと来た道をひき返すはめになった。山田から浦田へ行く間は、外灯どころか家の明かり一つみえない。あるのは捕まえた三匹のホタルと、もやに霞んだ月の灯りだけである。

ホタルとの出会いは、明日、倉石を出立するという日に訪れた。話を聞かせていただいた方の写真を撮り忘れ、夕食後、北向集落に行った帰り道、丘のふもとのあぜ道を歩いた。あたりはすでに暗くなっている。ふと上を見あげると、木にホタルがとまっていた。そして、まわりには一匹、二匹と飛びかっている。何といっても圧倒されたのは、水上（みずかみ）地区へ行く道との合流点付近。そのあたりの木々に、ホタルが数えきれぬほどとまっていて、さかんに光の点滅をくりかえしている。さながらクリスマスツリーのようだ。

またいつの日か、あの「ツリー」を見たいものだ。

【伝説】

ザシキワラシの話①

（太田）

ザシキワラシは、家の守り神様だって。男の子だか女の子だかわからないって。それは家の守り神様だって。ザシキワラシが来ると栄えるそうです。古いうちには、ザシキワラシ いるって言ったもんです。

ザシキワラシの話②

（鳥沼新田）

誰もいない大きいうちに、

「あすこさザシキワラシ出る」

なんてしゃべったのは、聞いたことある。誰も人さようけいなくなれば、

「あすこさザシキワラシ出る」

つうの、おら ちっちゃい（小さい）とき聞いたことある。

さみしい所さ、そういうの出るつうんです。ザシキワラシってこう、音がコトンコトンと歩く音が聞こえるっつうんことでねえすか。

マタギの話

（北向）

マタギが、家の人が止めてもきかない。行ったら正月のとしとりの晩、獣を追って。

そしたら、その弾（たま）を撃ったんだけれども、襲いかかられて、その熊に殺された。

だから正月の元日の日には絶対、生き物を殺さないでなぁ、けだものも、人間も、とげびらも皆、親子よろこんで

会える日なんだから、元日には、けだものを撃たねえ。

きつねにだまされた話②

（北向）

あの、あのちょっと田のすみの木の陰に、あの、あそこは、うちの分家だけれど。

あのー、皆さんわかります、（・・・聴き取れず・・・）ていう山菜、山にいっぱいこの湿地の下ところに、いっぱいあるの。

そして、あのほら、あの水の水源地のそばっこだから、よくそこにあの、稲荷様ってあるの。稲荷様ってありましたったの。そのそこの川のこと いねんじゃま（稲荷様）っていいましたったの。

「稲荷様いる」

ってよくいわれましたったの、あのほら 白い稲荷様ってな、いわれてましたったの。

そして、あのほら そのいねんじゃまのところに、その（・・・聴き取れず・・）がありましたったの。そしてあのほれ、いっぱい採って しょってきたんだって。そしたらあの、こっちがうちなのに、そっちのうちさ、あのよそのうちさ行って あの入ったって、あのしょって。そして、

「きつねにだまされた」

こったって いってやったの。

きつねにだまされた話③

（提灯行列）

（北向）

灯（あか）りつけてって、そのお酒のむ人が、あの酔えば、アーッ アーッ フーッ て叫んで歩く人だったの。したっけ そのあの、いねんじゃ（稲荷様）が、提灯をいっぱいつけて、そらゃ そ

の明るくしててな、いっぺえ そのあの、だます気なって、そのだます気なって、ちょうちんをいっぱいつけたの。
あのよくその人（だまされた人）が言ってましたった。

きつねにだまされた話④

（きつね火）　　（北向）

（・・・聴き取れず・・・）陥落（太平洋戦争のこと）って、ほれ 日本で占領してね、あの、提灯祭り、ほれやったのね、その当時は。あの、そしたらほれ、あの、（・・・聴き取れず・・・）、提灯祭り見てえと思って出たったのす。
そして、あの、提灯祭り終わったし、ほれ帰ろうと思っていたら、また提灯が、またバラーッとついたってなす。提灯祭りが はぁ 終わったのに。
あのーまた、提灯が出たのは、はぁ、これはきつねにだまされたべかと、そう思ったけど、きつねだった こったってな。

きつねに化かされた話①　　（舘町）

本当にあったんだ。事実だ。
おら、若くて とんび（鳶職？）もやったし、様々な役さこなし、では るとふたりでやったんだ。
この倉石の内さ、あらざらけっていうんだ、村有地を畑さ おこしたところ。村でもっている土地を開墾して、その場所をみなれたんだ、倉石中な。
そして、こっちからこうまわって、沼沢っていうとこあっちにあんだ。そこまで行ったら 暗くなって そこで御馳走になって。御馳走になって、姉っこ二人出て、（・・・聴き取れず・・・）くるに 山中さ伝わってきたんだか、北向（地区名）

まわって来たんだか（・・・聴き取れず・・・）山中の方、来ることになって やって来たんだよ。

そして今度(こんど)、沢っこさ来て 沢に、たこ っちゅうところあんだ。谷こえて、今度は こっちさ あがってうだくだてさがったのあったがなぁ。あれ、きつねにだまされたって。

きつねの馬車

（太田）

きつねが馬車に化けたそうです。馬車ひいて カランカランと鈴かなんかつけてきたそうです。向こうから、たら、自動車が ずっと行ったらほれ、どっとほれ、その自動車がその馬車馬をひいたそうですよ。

「さあこら大変なことだ」

と思ってみたら、やっぱりきつねはきつねで、きつねの正体をあらわして、大きいきつねも ひいたって いってましたって。その人が しばらく山を歩けなかったって いってました。

きつねにだまされた話⑤

（太田）

野良から遅く帰ってくるでしょ。そうすると、途中で化かされたっていうふうになると、道じゃなく 田んぼをこえて歩いたり、草むらを夢中になって かけずりまわったり、そんなことがあるわけ。

きつねにだまされた話⑥

（太田）

馬の尻さ、こぉやって見てたど。

「何やってたの」
っていったっけ。
「今、戦争みてた」
って。戦争みてたって、きつねにだまされて、ほれ、馬の尻さ、ぴたっと目あてがってたら、ブッブッって、馬の（・・・聴き取れず・・・）そしたっけ、
「何やってんだ」
って聞いた人も、こっだ きつねにだまされて。この（・・・聴き取れず・・・）戦争だってみたと。
そしたら、だまされて、ブッブッって、おなら鳴らしたら、それが戦争にみえたって。

きつねにだまされた話⑦

（鳥沼新田）

魚、町から買ってくれば、なんか この山のかしらの方にきつね いるらしくて、家さいけば、何も入ってなかったって。

きつね捕り

（宮台）

むかし、毎年、ここの部落で ひとりかふたり きつねに化かされて、とんでもない病気したり、二日も三日も家に帰ってこなかったり、そういうことが たまたま繰り返されて。
「これでは大変だ、とにかく、だます親ぎつねを捕らなければ。いつもこれが その耐えられねえから」
何とかいい方法はないか、というので、部落全部が ほれ寄って、うちの孫じいさんの話だと うちさ寄ったんだって。
みんなの家から旦那さんどあほれよってきて、
「いや、今晩こういう相談だから皆、まず ほれよく考えて、どうせばいいか話してくれ」

というので、相談始まったんだって。
一晩まず相談したらしいの。そうして、いやとにかくそのキツネをとる方法を出さねばならねえというので、いや捕るたって どういう方法で捕るか。
「それだあの、一番いい方法があるから、まず俺の話 聞け」
というので、うちの分家にそこにある、ここではマタギっていうんだが、なんでも、きつねでもタヌキでも捕る上手な猟師でほれ、鉄砲撃ちの名人があったらしいです。その人が、
「何にもいらねえや、誰か そのきつねにだまされねばだめだ」
ここの後ろにずーっとその山があるんですよ。そこにいるきつねが、ほれ だますわけだから。だまされる人は、ほれ あの誰だか まず それをあれひった。
相談したら、すでにその人は亡くなりましたが、ウシゾウという方が、これは度胸のいい、私ら小さいとき、うんと知っているが、これも猟師で 熊 捕ったり いろいろ北海道の方へ行くんですよ、季節に。その人が、
「いやいや、その だまされるのだら 誰かれって。私がだまされるから」
ほい(それで)で、あの話は だいたい決まったから。
「んじゃあ、いつ行っかんな」
って。
「いやいや、いついっかもなんもねえ、すぐ明日の晩、実行さねばなんねえ」
っていうので、そいでまず、話しゃあ決まって、その二、三人まず、そのきつねのとても好きなアレッていうのは、油あげ。これがきつねの大好物だから、それをうまくコンガリあげて、ごはんさ入れて、食べんのでねえからに 匂いだけさせてしょって、夕方明るいうちに山さ行って、まず、たきぎとるまねをしてもいいから、そって夕飯ごろ 暗くなったら、
「やいほう、やいほう」

っていろいろ話しながらその山へ歩いてくれば、必ずだまされるから、こういう ほれあれで、そうしてちゃんと準備して行ったらしいんですな。

そして、夕方 もう暗くなってから、まず ほれ その天ぷらを においするように出したか、それもって、

「やいほう、やいほう」

ってきたら、

「やっ、なんだか人の音ぁすんだな」

って、まず ほれ 誰かその二、三人のうちで言ったらしいの。人の音がするようだな、というところをきつねが つかまえるらしいんだよね。だますきつねは。何も音もなんもしなくても。そこがやっぱり人間より下(した)なんだ。

そう言ったところで、パチカチカッキカキって ナタを使うような音が確かにしたというんだ。

「やっ、だれか いたらしいよ」

って ところで、ほれ きつねをだましてんだ、そこでね。いた、いたってことで、

「おーい」

って言ったら、

「ホーイ」

って、またほっちでも言ったらしいの。

「はあ 暗くなるあんべえ、あんべい」

って言ったっけ、ほれ、

「なんかん、あんかん」

て、わけのわからねえ声がしたというんだ。そこで、も少し声をかけてみると、そったら、ほれ すーぐそこを、むっかし、むっかしってきたじょうな。年取ったおじいさんが、

「いや、時間が遅くなって、帰んねばなんねえと思って、俺も一緒に連れてってくれえ」

って、そのおじいさんがゆったらしいの。

「いやー、いいもなんも、先になって歩けって」

いや、まあ 先になればなんかほれ、かっこんだられたりなんかするから きつね。

「いやー、おらは 先はわかんねえ、あとついてゆくから」

で ほれ、まず それから谷へ下がって、そこに小さい小川あって　そこ越えてくるもんだから。

そこの小川越えてきたら、どうも 後ろさあんまり近く寄ってこないらしいんだよね。寄ってこないや、きつねだもん。そこで、

「やっ、おじいさん、あのー歩けなから、おんぶすりゃ」

「ややー、おんぶしてもらわなくても大丈夫だ」

で、ほれ さっき話した そのウシゾウっての、

「ややー、こりゃ まだきとせいの。あんたがた二人、三人おぶったって、どっでもねえからおぶされ」

「あーおぶさんねえ、やーいいです、いいです」

てのを、まずびりっとやってほれ、おんぶしたってんだ。

そしておんぶしたら、

「それ歩けっ」

ちゃあけで、さあ、三、四人、

「やいほい、やいほい」

て、どんどんどんどんと歩いてきたんだって。そいで、うちが見えるこの上のあたりへ来たら、

「いやー、俺 少しあのオシッコしたいから、おろしてくれ、おろしてくれっ」

たって びいんとはっては、こんだわかってしまったからびんとつかんで ほれ、とうとう うちへおんぶしてきたんだって。

はぁ、うちでは、来るっつうのでほれ、あの灯(あか)りっこして、たいまつ たいたのなんかして、なに、おんぶしてきてこの そっと降ろして、びんと縄かけて そして 見たらほれ、やっぱり きつねでね。はあ、正体がちゃんとわかってしまって。そこで、そこへ引導(いんどう)をわたす話が、また おもしれえんだ。

「今まで、そのここの人を何十回もだまして、ケガさせたり、病気させたりして、お前 やったのだから、お前を許すわけにゃできねえ。ここでみんなで骨も皮も頭も みなはいで、あれしてやるから」

って宣告したらしいんだ。いやそうしたらそのきつねが、

「いや、今までは悪かったが、絶対 今度は もうだましたり、そういうことをしないから 命だけは助けてもらいたい」と。そういうことで、

「いや、どうしたみんな、ほれ 許すか、はぁ ここでまず許さないで片付けるか」

なんて話したり、

「いや、これほど言うのだぁ、いやまず 今度は だますことはないだろう」

つうことで みんなの相談の結果 ほれ、放してやったんだって。それからきつね、人だますらねんだって。

それで、どっとはらい。

狐にだまされた話⑧

（槍沢）

この部落にもあったですよ。まあ酒飲んでこっちから こっちの上のほうさ 行ったがあんですよ。

昔は、衣類にするために大麻畑をつくっていたですよ。それの畑さ 飲んできて、きつねにだまされたっつうわけで、その畑を こいであるったそうですよ。

薬師様の伝説

（槍沢）

お薬師様につきの木（けやき）が三本あるんですよ。その根に水がたまるんですよ。その水が薬だというんですよ。それで、ずいぶんお客さんがきました。

弘法大師様の話

（北向）

むかしは、あの～、あまり作物を作っても 草とかそういうものは、あまり生えなかったそうです。

そうしたら、あの～、ほら、人がぜいたくをしたり、道楽をしたり、そうしてほれ、道にはずれたことを、あやまちをおかしたり そういうことが多分にあの～、あったりなんかしてきたからね、今度はそれにあばくて 人があまりそういうことにあれば、仕事がいっぱい何でもあって、仕事をするようになったらほれ、そういうこともなくなるんだろうと思ってそれ、今度はあの畑とか作物をつくっているところに それに適したように、それに適したようにこう人々に適したように 草とかね、そういうものの種をまいてね 歩いたとかって聞いております。

甲斐の国から あの～、ほら 午後の日暮れのとき、ほらここの村へ（弘法大師さまが）落ち着いたって。それだからほら あの～、午後 御神酒をあげるようになったって。

山梨県から 甲斐の国から来たって、あの～、うちのおばあちゃんたちは、話しておりました。

そしてほれ、夫婦二人で来たって。そうして あの～、甲斐の国から来たからって、お正月の十六日の朝には、白いおかゆ、必ず白いおかゆを煮て食べるの。

はあきの神様

（北向）

よく神様が 薬師様に泊まったそうです。そうしたら、あの～、夜中にね、薬師様のところにほら、お産があるってあの～、お知らせが まず届いてきたっとかねえ。

そうしたら あの～んば、ほうきの、昔の言葉だんば はあきというだけどな、んば、

「はあきの神様 きたんべか、はあきの神様 こねんば、産まれねえや」

って、その神様がいったそうです。

そうしたら、ほれあの～、はあきの神様とこに行って　ひいてくるって薬師様がいったそうです。

そうしたら、薬師様が　はあきの神様を迎えに行ったらしくて、そうして間もなく　産まれたそうです。そしたらあの～、立ち合った神様たちが、ぎょうさんのところに立ち合ったと思うたけど、一人の神様が　あの～、子供が十三になれば、杭さ　ひっかかって死ぬ子供だって神様が言ったそうです。

そうしたらね、その十三歳まで育って十三歳になったらあの～、そこの土にこう　木をといでね、刺しておるでしょう。それをこの地方では松杭というんだけどもね、その杭にひっかかってね、亡くなったそうです。

そしてハンガイにある薬師様は、とても位の高い薬師様で、よく神様がそこに泊まるっていうか　そこを宿にするとかってね、そんなことを聞いてきまっしたったけど。

【注釈】はあきの神様（箒神）・・・出産に関係する神様。

鳥沼の伝説

（鳥沼新田）

鳥沼の明神様って、ずっとかしらの方に沼があったったのです。それがやっぱり　神様が言ったんだか、

「鳥っこ放してけろ」

っていて、鳥っこ　おいたったらしいんだなず。夜でもニワトリが山にいて鳴いていたったって。

朝になれば、コケコッコてなす、鳴いていたったって。そいで、その明神様が　ヘビの明神様っていってました。

牧内の沼の主

（北向）

ここの舘町って所が、昔、殿様がしんで、お城があった所だったそうです。そして　あの～、ほかの部落からも買い物に舘町の部落へ来たんだって。

そして あの〜、牧内って、このずっとうしろの部落ですけれども、そこの部落からも、お魚買いに来たってね。そしてお魚買って帰って、牧内の沼ん所まで行ったら、よくお魚は 今の人は、あのパックにつめたりなんかしたお魚でしょ。むかしは よくあれ、頭に縄ひっかけて、こう下げて、あの買ったまんま、あのどこのうちでも、頭に縄ひっかけて持っていったそうです。

そしたら、牧内の沼ある所まで行ったら、そのカレイがね、頭の所が あのほら、縄にひっかかってね、その下だけがこう、取れたそうです。そしたら、その（胴体だけの）カレイが、ちょこっと沼に入ったそうです。そして、あのほれ、牧内の沼の主は、カレイでも頭のないカレイだって。

牧内沼の主の伝説

（太田）

滝沢のほうからお魚買いに来て、縄にさしていたんだべか、牧内に行って何だか、

「水さ入れて洗っていくか」

っと思って水さ入れたら、そのカレイが離れて、ぬけていって いなくなったとか。

そして、そこに沼がありますの。だから牧内の沼は、カレイの主（ぬし）だとか。

牧内沼の主（ぬし）

（牧内）

牧内の沼をカレイの沼という。沼の主さ、カレイだって。なぜカレイが主なっていうと、川のつたいに行くと（神社）あるでしょ、そこ ちょっと行くと、舘町っちゅう部落ある。

（その舘町が）昔、栄えたとき、たくさんの店あったわけだ。魚屋もあったでしょう。この辺の人だ、魚買いに歩いてそこまで行って・・・

ある人が、カレイを買って来たわけなんだ。そしてあるって来て、ここ（牧内）に来て、沼で（カレイを）洗おうと思って、沼で洗ったら、死んでたカレイが急に生きて泳いでいってつかめなんだ。そして カレイの沼に、カレイが主と。

それが最近、ごく最近まで だれも深さは知らなかったわけだ。でも、はれなか、水は 真ん中からわいて。ところが、こないだ、十勝地震ってあったでしょう。ゆれてゆれて深いところが埋まってな、浅いのになったわけだ。

翌年の年だか、干拓ってもん（・・・聴き取れず・・・）はカンカン、水はすっかりかれたわけだ。そんとき、ここら辺の人は、初めて沼の底が見たわけだ。そして、こんな大きい（一ｍくらいだったか）コイをとったわけだ。

今は、浅い。昔は深さ知れない深いものだった

牧内沼のカレイ　（舘町）

（又重弥五郎さ 来て城つくって）下さ町つくることになって、町つくった。町づくりっちゅうのは（・・・聴き取れず・・・）ぎっしりと家屋が並んで、様々な店屋も出来たんでぇ。一日増しに お客様、はいるようになって。

こんどは、あるとき、四和村って上北郡から五、六人の人、買い物に来たんだって。舘町さの、買い物に来て、そして、買い物をしらなしたもんで、腰掛けちゃあさよって一杯飲んで、そして いわずに なにしゃくとれるようになったらば、

「いくんでぇ」

っていうことになったら、一人の人、えさのみやげに大きいカレイ買ったって。ほして、ほんだほれ、そこさ 縄とおして、かぎれたんだ。

そしたら、このお城に まがめぇ女までまる。そのとだなも生い茂って さびしい沼だったそんだな。

そのおっきい池のまわりに いまなぁ、ほれ、ほこらなしてその中に水のかがみのたびなま、いまはぁ、沼つれて、かたむひたんだぁ 遠足に行く場所になっているんだ。

そこまで行ったら、ほら 縄がつながってなぁ、かれはたらいて、ほってこれからもうにてほたどけて沖へ行った。

それから つごい いっしょにいったたんだぁ。ほういろきらしてみやって話あって、不思議なことあればぁあるもんだなぁ。

にほ、はっとき はっときにほ、いったらほれ、いったらほれ、かけいとしては あまきもよのこくこくらくなるあかるさなれば、その小の中よかきまわっているのあんだ。かし(頭)らねぇ、カレイだ。

北向の権現様

（舘町）

この権現様、慈覚大師様がつくったって、千百年前の。慈覚大師様は、山形県の立石寺を開山して、それから今度は、岩手県さ来て、岩手県の中尊寺を開山したんだ。開山してから今度は、恐山さ行く。恐山さ行く途中、三十何回も昔なんだば 歩いてゆく。（・・・聴き取れず・・・）様々の調査しながら来たものを、北向(地区名)さ来たら、くたびれたんでしょう。泊めてもらって、そのお礼につくったのがここの権現様だって。そう言い伝えているんだ。

火事を逃れた権現様

（舘町）

慶長年間、舘町ゃ大火事になって、大切なものでもなんでも皆焼き払った。ほんで、いい資料になるもの、なんも

残ってないぞな。

権現様は そんで、ほれ、別当のうちさ置くんだもんで、そのうちさも焼けたの。焼けたんで、だれさ持ってったんだか、どんだか、ともかくまず（飛び石）逃れて（・・・聴き取れず・・・）あん部落には、まず焼けないでいたったということですわな。

（権現様のおったとこを）飛び石とかなんだか、そんな名前 みんながつけてるんだ。（権現様は）高いところの畑に座ってたんだか、なにしてたんだかしていた石さ、今あんだ。畑の中にな、その石さ。

北向のえんぶり

（北向）

舘町の権現様さ、ここから又重（またしげ）様が、ここにあるものを持っていった。そして又重様は盛岡のシズキブ町っつ芸能の町から、権現様もってったかわりに、えんぶりを北向にもってきてした。

舘町（たてまち）の由来

（牧内）

舘町ってほれ、小せえ四十戸くらいの部落だ。なぜ小さい部落に町ってつけたとかと。

その昔、城があった。今は城の跡ある。城のあった時代に城下町だったわけだ。それがほろびて城もなくなる。城下町も町があったたけども、（・・・聴き取れず・・・）舘、城があったから舘と、城下町だったから町と、今、舘町ちゅうわけなんだ。

桑の木をまつるようになった話　（北向）

オシラ様は、咎(とが)める神様だてなす。なんでも咎める神様だって、あの言われてるんだけどな。

あの、おかいこ売りに行った人が、あの、かいこでなくて、繭(まゆ)を売りに行った人がね、あの 帰らなくなったと思って（さがしたら）、桑の木にひかかって死んでらったてね。そして、桑の木を祭ったとかって。

小川原(おがわら)湖の主(ぬし)　（北向）

小川原湖の主はね、兄と妹が（・・・聴き取れず・・・）。兄沼と妹沼があるそうです。

【注釈】小川原湖には、姉沼・妹沼という姉妹伝説（姉の玉代姫・妹の勝世姫）が残っている。

十和田湖の話　（北向）

十和田様は、そのう、南祖坊(なんそのぼう)っていう名前だ。相馬蒼前、藤原長清（・・・聴き取れず・・・）から出て、八戸港に着いて、今度は丘に上がって十日後、ヨゲ殿、昔の地主、大地主にやっかいになって暮らして宰相にならぁした。

そして長いこと（・・・聴き取れず・・・）成功して、（・・・聴き取れず・・・）子供がないで、あそこのとうばのガケ、山にヨギ観音って観音様があるんですよ。そのヨギ観音にお参りして、神の申し子が、十和田様が、南祖の坊が生まれた。

そしてその、何年か（して）頭のいい、都へ行って学問習って、そういう難行した。

それから、そこのナラサキの観音様のもとで何年が修行した。それからだんだんと、のぼって、ときの十和田様というか八太郎とケンカして勝って、それか そこにおりなさるようになった。

八太郎（はったろう）

（牧内）

金で作ったわらじさあるだろう。十和田湖の神社に。十和田湖の主（ぬし）は八太郎、その八太郎が生まれた場所あるだよ。

そこで、そこから はいていったわげだ。歩いて歩いて、とうとう十和田まで着いたら、いくら金で作ったって、緒は金でねえんだども、切れたわけ。

「こりゃ切れた緒では、おれは歩けねえ。ここの主になるしかあんめえ」

（そして十和田湖の主となった。）

八郎太郎（はちろうたろう）の伝説

（北向）

どこのあの～、山んだかわかんないけんども、たぶんは八戸のそばっこに、八太郎（はったろう）という名のついた場所があるから、そっちの方だったんだかわかんないけんども。

昔の人は、彼岸の中日といえばこの辺でも、そうだったけんどもみんな薪切りに山にあがったの。彼岸の中日といえばね。そして あの～、たぶん 八郎太郎も そんで山に仲間といっしょに行ったったと思うけどもほれ、代わり番こに あの～、当番でほれ、ご飯（はん）たくようになって、八郎太郎も自分の番がきたところで おさかなを焼いたり、ご飯のしたくしたりして、いたそんですけども、あまり あの～いすく（おいしそうに）煮えたもんだから、みんな帰えらないで（帰らないうちに）食べたくて食べたら みんな食べてしまったそうです。

そしたらこっど（今度）は、のどが渇いてのどが渇いて下（しも）の沢について、手ですくい飲みをしたそうですんけども、のどの渇きを潤すことができなくて、そして今度は、ほれ、沢の水を止めて今度は、自分でこう（川に直接、口をつけて）飲んだそうです。

あの～、及ばないから 自分でこうやって飲んで、下（した）の水

鏡に映った顔が人の顔でなくてほれ、蛇(じゃ)やぁ、龍(りゅう)の顔がほれ、角がはえてね、あの～、映ったそうです。これがあの～、こういう顔だのかと思って、自分でもビックリしたねなっす。

そしたらほれ、こんなば自分は、みんなの人と一緒に生活していられないと思って、どこさ行ったらいいかと思ってほれ、あの～、思案したあげくだべ、あっちこっちこうさまよって歩いて、それあっちいっても わが住むとこない、こっちいっても追われる。

そして、この辺もたぶん通ったと思うんだけども、ここの あのフエナ(?)という所に離れた一つあって、薬師様が立ってますけども、あの～、ドカッとしたモッコで山からほってブーンと投げて ここをせきとめて、水を溜めてここを自分の棲(す)み家(か)にしようと思ったそうですけれども。

それもあの～、あすか(徒労)に終わったらしくて、また上っていったらしくて《またどこかの部落でせきとめて水を溜めて、棲み家にしょうとしたが失敗》、

「ここもだめ、あそこもだめ」

って、とうとう まず十和田っ湖まで来ましたっだんがね。

その途中で 八郎太郎のほれ、わらじについた土をね、こうはたいた跡がねありますだねっす。そしたらほれ、十和田っ湖があって、

「ハーッ、ありがたい。ここがせきとめることもなくていかったす。ここが わが棲み家になる。」

と思って何年かここに棲(す)んだんだか、どのくらい棲んだんだか詳しくはわからないけれども、棲んでおったそうです。

そして南祖の坊っさまがうちを出るときに、金(かね)のわらじと金のつえをついてね、あの～、渡されて親に渡されて、

「わらじのヒモの切れたところを自分の住み家だと思へ」

と親にいわれて めぐりめぐって、十和田っ湖でプッツリ、ヒモが切れたそうです。

そしたら、

「親にいわれた場所がここだ。ここがわが住み家だ」

と思ってほれ、住んでいたら、八郎太郎が自分のところへ

来たと（南祖坊は）思ったべす。

どこだば、どこだって争いになったんでしょう。そしていくさをして、南祖の坊さまがほれ、おさげ(?)かかって、八十なんぼだったんだかはっきり記憶していないんけども、カネのはしごがあるんだす。そして、坊さまは、

「どうぞ、このいくさを勝たせてください」

と剣を投げたそうです。そして、その剣を投げてね、治まらなくてね、そんで持っていた石をね、投げこんだそうです。

そうしたら、うねが煮えくり返っていたそうですが、カタカタカタッていくさのために、静まり返ったそうです。そしてね、八郎太郎の赤っかい岩があるんだけども、血を流していくさをしてね、とうとう八郎太郎が勝つことができないでね、逃げて逃げて秋田県の八郎潟に逃げてね、主がいなかったんだか、八郎潟に住みついったてね、そしてその坊さまは、十和田っ湖の前に家をたててね、住んだそうです。

そしてあの～、過ごしているうちにあの～、田沢湖にいる辰子姫(たつこひめ)という主(ぬし)がいたそうですけども、その辰子姫と恋仲になってね、冬になれば その田沢湖に行って、暮らすそうです。

そしてあの～、愛のぬくもりで、冬でも凍ることなくね、暮らしたと聞いてますたったけど。

八太郎(はったろう)伝説

（舘町）

八戸のそばに、八太郎っていう部落がある。今も。そこは何軒かうちあるところで、昔はダケ(岳?)さ行って、マンダ(シナノキ)の皮はぎに行って、マンダの皮はいで、そして蓑にして、雨具な（・・・聴き取れず・・・）。

一郎とか二郎とか三太郎だとか四太郎だとか、八人の兄弟の、そんだ、ほら、八太郎で。でさぁ、七郎んだんだか

とりごんだか、どっかで、二人でウガンダタケさ行って、マンダの皮はいで、とってきてやるんだ。ダケさ。

そして（・・・聴き取れず・・・）汗流して皮をとってたら 昼飯にもなるんだって。こんど（親方は）八郎さ いいつけて、

「昼飯にもなるんだして、おめえは沢さ行って 水汲んでこ。昼飯炊いでして」

で、沢さ行ったども、沢さ行ったらほれ、イワナ二匹とか三匹とかいたった。イワナいて、それをとった。とってもきれいだ、とってもにおい、香りこ 良くて、香りこ 良くて、でっても食いたくなってきて（・・・聴き取れず・・・）

そしたら、

「なに、親方さ（・・・聴き取れず・・・）こうしだったっていえばいいんだ」

ってつもりで、それで食った。

だでよ、まあ、食ったって、まぁだまだ 食ったくなって、おせなかったことにしては、皆食ってしまったんだ。

そしていて、しばらくあったきゃぁど、今度、のど渇いてきた。水飲みたくなって、こんど汲んできた水飲んでも、これでもっと（水飲みたく）なって、とうとうしまいには、沢さ行って水汲んできたども、沢でね、口で水飲んだ。水飲んだっけ、からだは太くなる。恐ろしい このからだに変化してきて、たら、ほれ、親方、なぁんぼも水汲みに行ったのこないと思って捜しだっきゃ。こげん、なんで（・・・聴き取れず・・・）けいかいを話しして、

「いまは、はっときもねども、怒りに おうたからなった」

大きな、まず、ヘビなんだか蛇（じゃ）なんだかな。

「たぶん、怒りに おうたか（・・・聴き取れず・・・）なれば、この辺を湖にしてしまうでしけ、ずっと、急いで去ってしまえ」

そして去った後に、こんど あばれまわってだから、今の十和田できた。十和田できて、沖のとこさ（行って）それがこんど、主になっていたら安定した。

・・・話変わって・・・

今度は、南祖の坊主って（いう）坊さまが諸国漫遊して、熊野さまちゅう神様さ行って、たぎたんもかけたった。金（かね）のわらじきて、

「このわらじの切れたところが、おめえのいくどこんだ」こう、教えられて、そして諸国まわってまわって 十和田さ行ったきぁ、わらじ切れたども。

「ほんだ、ここは、わいのいんところだ」

そこで こんどは八太郎、こんどは 負けねえばならんことにったんだ。負けることになってこんどは（・・・聴き取れず・・・）熊野ちゅう神様から授けられた写真だして、

「去れ！」

って、言ったんだ、高い坂から。高い坂から、はるか向こうの沖の、ほら、こんどはものいらねえで、

「我こそは、八太郎っていうので、ここよ、何十年も本拠地として暮らしてきたんだ。去れとは何事だ」

そこで お経と、くっつうくんだが、はたぁくんだかの、ほれ、格闘始まった。七日七晩やりあった。なにこんどは、パラッパラ、その（・・・聴き取れず・・・）お経読んだんです。パラッパラ（・・・聴き取れず・・・）そのあまりお経は、唱えるのは呪文が弱くて そばさ寄れなかったそうなんだ。最後には、危なかったんで、最後の呪文状読んだら、

「とっても勝目は ねえ」

って。そういうなんでほんとは、八太郎逃げたんだ。逃げて行ったところは、今度はほれ、八郎潟さいったっんで、八郎潟は、はれ、八太郎の八郎潟だ。

そこらさ逃げてな、ちょうど五月の節句だ。こんじゃ、せきとれば、蓬（よもぎ）と蒲生（がもう）と こう屋根さのんだ。魔除けで。それやっているところじゃ（八太郎は）とても休むところじゃなかった。おっかなくてな。それが なにかに見えたんだか。（・・・聴き取れず・・・・）ばばとじじのいたところさ行ったら、そういう行事やらねえ。そこに幸いとはいったわけだ。そして少しいたら、

「ここさ、主になるのだ。かくのでいるのだすけ、おめえだら ここさ去れぇ」

そして、そんだぁ 少しくらいかきまわしたた。そしたら、ほれぇ、水さ湧いてきたんだ。それで、出来上がったのが八郎潟だ。

八郎潟をよぉ。八太郎根拠にして八太郎いたつぅんだ。ところが、日本海さ寄ったところで やっぱり、やたらに寒いんだ。やっぱ、やたらに寒くて氷張って、とってもそこにいれねえって。それから今度は、田沢湖さ移ったつぅんだ。

毎年の秋の十二月の（・・・聴き取れず・・・）になれば田沢湖さ行った。その田沢湖さ移るに、一日にほれ、行けなかった。あるところに泊まって。そのお客様、立派なお客様になって泊まったんで、泊まったために休んだら(主人に)、

「休んだ部屋さ絶対見ないでけろ」

こういうの、ほれが（・・・聴き取れず・・・）昔から泊まっていても見ねえでくれる。ところが、世の中変わってきぁ、なぁんも昔の（・・・聴き取れず・・・）ちょっとこりゃ、はっちょうなっさって見たところ、とびらこう、ふすま こう開けてみた。したら、部屋いっぺえになってだな、ほれ、大蛇だったって。たら、ほんで朝さ なったったら、お客様に会って、

「今まで長く世話になったもの、泊まりなくなったし」

ってって。でぇ、出かけていったのを、今度は、そこの家泊まらへんで、こっから、八郎潟から田沢湖へ。えんどは深く、比較的水はぬるいってつうんたんだ。

ほんで、こっから（八郎潟）ここ（田沢湖）まで行くに、泊まったのを泊まんねえでほれ、雨、風、台風、雨風さ降らして（・・・聴き取れず・・・）まず、雷雨をともなってさびしいおとなりで飛んで行くにした。

【補足】

それ（八太郎）泊めているうちは、ほれたいしたそのうちは、裕福になったったけ。泊まらなくなったきぁ、一日

ましにガタガタガタとふっちゃくなってぇ今では、そのうちのかたさなくなった。
昔から蛇、なんでか、大した蛇の夢みても何かいいこと授かるって説あんだな。

柿の木斎藤の話

（北向）

柿の木（地区名）には沢があるんですよ。その沢でね、柿の木斎藤と大畑一郎兵衛という方が戦をしたんだって。にぎり飯をぶつけあってね。そして、戦をしているうちに 御飯が沢に落ちてね、甘酒になったんだって。
そしたら それが流れて流れて、川代（かわだい）というところに来たら、川代の人が鍬（くわ）で流してやってね、そして、鹿田（しかだ）っていう部落まで行ったら、今度、その甘酒が酸っぱくなったんだってね。
そして、今度、それが 古川代（こがわしろ）というところまで来たら、コガアライ（洗い桶？）になってそこで終わった。

三つのオダキ様

（北向）

武士が柿の木というタイ（？）があってね、広い野原の でっけい原、一軒のバラックだったんでしょう。たぶんそういうところに、柿の木斎藤という武士が住んでいたそうです。そして何年ぐらい住んでいたかもはっきりわかんねえけんどもね、柿の木斎藤という侍が住んでおって、そしたら ある晩に、あの眠ってたら、
「柿の木斎藤、気をつけろ」
と言われたと思ってね。目を覚ましてあたりを、刀を左で持ってあの～、あたりを見回してね、何にもなくて、そこには大きなほと、畳四畳ぐらいも敷く大きな石あとのいっ

ぱいある所だね、石神様というから。そしてほれ、あの～、言われて起きてみてな、あたりを見て なあんにもなくてほれ、今度また眠ったと思ったら、また、

「柿の木斎藤、気をつけろ」

って言われて目覚まして、また刀を、柄に手をかけて見ても なあんにもなくて、これも夢だったのかなと思って、眠りについたら、もう一度、三度目の あの～、三回、

「柿の木斎藤、気をつけろ」

と言われたらしくてね、目が覚めてね、これは本当に神様のお告げだと思って、今度は気をつけなければ、と刀を差して、外へ出てみたら、そこへ、ピカピカピカピカピカピカって天から、あの～、昔の人は蛇(じゃ)ぁというんだけどもね、あのほら龍が落ちてきたそうです。柿の木斎藤、侍の元に。

このこと、神様告げたのだと思って、これを退治しなければ 自分が危ないと思って、あのほれ、持っていた刀で三つに切って、尾の方から剣が出て、天から天下りした あの～、蛇ぁであれば、ここらさ、こうやって投げて粗末に投げて置かれねえ。あの～、大事に取り扱わなければならないと思って、そして、一番の頭は、ほれ今、現在 ほらへライ(新郷村戸来)のオダキ様といっているけれども、その場所さ 持ってきて、祀ったそうです。そしてまた、真中は それより ちょっと離れた二キロぐらいでしょうか、そのぐらい離れたところだけども、真中は そこへサイキって所に持っていって、あの～、祀ってね、オダキ様っていって、そして 尾の方は、一番の剣の出たところだから、高いところに祀らなければと思って、高いところに祀って、そこもオダキ様と。わたしは、行って拝んだことはありませんけれども、三つ同じオダキ様だそうです。

そして あの～、昔話だから、マチマチで なんだか人には通じないところもあるようだけれども、そらが あの～、龍っていうのが結局は、キリストだったってね、そうですってね、聞いて覚えております。

そして あの～、結局 あれだったっていうのは、龍を三つに分けたっていうのは、それは、実際は キリストの子供

でね。そして、現在のキリストの墓にあるところに沢口という大きな家がありましたったが、そこには ほれ お嫁さんが来てね、子孫がこう続いてきて、今でもそこの あの～、おじいさんが、なんかちょっと日本人であっても、こう人と変わったとこがあるって いわれておりまったったの。

新郷村には『なんやとらや』という歌があります。『なんやとらせの、なんやとらや』って、それが、その スプライ語だそうです。そんで、あの歌の意味を 今もって誰も あの～、はっきりしたことは知らないそうです。

でも、まず要するに、キリストの弟が身代わりになって、十字架にのったってなっているんでしょう。そんだから、キリストが弟に感謝した言葉でないかって いわれているそうです。

カッパの話

（鳥沼新田）

（・・・聴き取れず・・・）ていうのは、今のカッパだべな。で、そういうのは、キャッキャッキャッキャッってさかんでいたったと。そいで、やっぱり 女の人 だまされて そういうの産んだ人もあったらしいって。

女の人が洗濯しに川さ行くべな。せば、そういうのが マヤカス ってんだか、そして、産んだ人もあるらしいんで、産んで 産んだ後、それがまあ人とは違うべす。

死んだと思って投げて、へば、投げて埋めてくるべなす。せば、こんだ カッパになって まわったらしかったんべな。そで、夜、キャッキャッキャッキャッって ないてるって。

【補遺】うた　予備調査より

ここでは、「うた」「なぞ」を主体とした語りと、予備調査（一九八三年三月二九日～三〇日）で採話できたものをおさめました。

なお、予備調査のときのものは、かなり修正を加えており、他編のものとは、おもむきが異なっております。そこのところを、おことわりしておきます。

また、テープの録音状態の関係上、文字にすることが困難で、本誌にのせることができない話もありました。ここでおわびしたいと思います。

わらべ歌　（北向）

旅の宿に宿とった
竹のさおこいだれば
竹のふしみっけたって
それじゃんぐりと割ったれば
赤い小袖っこ十二尋（ひろ）
白い小袖っこは十二尋ってな
十二尋にあまって次郎んぼについたれば
太郎坊がうらみる
太郎坊についてれば
次郎坊がうらみる
でんでときて
めでとなり野にじ野に来てどこまで送った
仙台まで送った
仙台のねずみっこ
あんまりあんまり賢くて

どこの子っこ盗んだって
なんぼなんぼ盗んだ
どうしっと（どっさりと）盗んだって
どんどの（どこの）お方厚紙食っておっちんだ
・・・ってな。

子守り歌　（北向）

あっちの山の白いぬこ
こっちの山の白いぬこ
ねったらねむかべ悲しかべ
ねねからシシコにとてくあせる（とって食わせる）

なぞ　（北向）

「たなの上にささめっぱ、それはなんだ？」
「・・・にわとり」

「おすぎは、おたまっこだいて、おたけっこ（竹）はおすぎっこ（木）だいて、おすぎっこはおみこし（水）だいているものなんだ？」
「・・・木で作った桶」

「たなの下の白いのこ（なんだ）？」
「・・・塩」

「たなの下の赤いのこ（なんだ）？」
「・・・みそ」

「いけばくるくるくもりの細道なんだ？」
「・・・のこぎり」

「行っても行っても つみだててしているものは なんだ？」
「・・・箕（みの）」
「兄弟五人してこっぱしょいなんだ？」
「・・・つめ」
「ここくのまちさ、兄弟二人まち（マッチ）使いにいくなんだ？」
「・・・ひばち」

てまり歌　（山田）

どっから来ましたオイモリ（お芋屋）さん
おいもは一升いくらです
三銭五厘でございます
も少しまけぬかスチャラカポン
あなたのことならまけてやる
ザルも出しマスも出し
切ればほいじょう（包丁）出しかけて
あたまを切られたやつがしら

（A）
きれっぽきられてとうのえの
おばさんお茶あがれ
お茶のニックラバシ（？）あがしゃんせ
ひーよ、ふーよ、みーいやよー
いーつむななやで
ここのつとお

（B）
きれっぽられてどうなります

尾ォも切られてあとはなし
も少しまけろやスチャラカポン
いくらまけてもだてません
これでおわりでございます

・・・（A）か（B）をうたう。

あやとり歌（お手玉歌）①　（山田）

あぁおばしげれるしげちゃんは
いろいろおせわになりました
あぁとでお礼はいたします
お礼なんかはいりません
まさしげ涙をうちはらい

我が子まさつら呼び寄せて
父はひょうぶにおもむかん
あなたのことならどこまでも
・・・

あやとり歌（お手玉歌）②　（太田）

すんざくぅろぉー
さんねんみそ
よーねん大根で
さいさいさい・・・

うた

（太田）

①

わらさんど（子供たち） わらさんど
花っこつみに行かねな
何花っこつみに
さくら花っこつみに
ひとえだ折ってかぁついで
ふたえだ折ってかぁついで
みえだめに日やぁ暮れて
おばの家さかけこんだ
おばの家に何ある
太鼓ある
太鼓の中に何ある
ふいこ ある
ふいこの中に何ある
息子ある
その息子を何とつけました
スタンタラコとつけました
スタンタラコの仔馬屋に
仔馬はなんぼつながった
四十六ぴきつながった
・・・

②

だけからだけからチョーマンドーリョコとんできて
ばんばの下で石っこ玉（いしっこだま）うって
かって、カラカラヘービのチョーヘービ・・・

きつねに化かされた話②

（中市）

大久保にきつねがいた。ある人が、ニシンを持ってそこを通りかかったので、きつねは そのニシンをねらった。馬糞を餅にみせかけて、その人が食べている間に、ニシンをとってしまった。気がつくと、ニシンはなくなっていて、馬糞を食べていた。

きつねの話

（向平（むかいたい））

（一）

きつねにだまされて、山の中へ連れていかれ、ミミズを食べさせられた話

（二）

きつねにだまされて、馬糞を食べさせられた話

（三）

姿は見えないが、足音だけさせるきつねの話

田っこ作り

（小渡）

むかしの子は、

「米っこかみたい、米っこかみたい」

そういった。

米っこかみたかったら、田を作れ

田を作れば 泥がつく

泥がついたら 川さ入（はい）れ

川さ入れば 流される
流されたら よしにつかまれ
よしにつかまれば 手っこ切れる
手っこ切れたら ととの粉つけろ
ととの粉つければ ハエがつく
は(ハエのこと)い、物語かたりそうろう

沼の主(ぬし)の由来

（牧内）

沼が部落にあるが（三代ほど前の人が作ったもの）、むかし、八戸あたりから魚を運んでいたところ、その中の一匹のカレイが こぼれ落ちて沼にはまり、生きながらえて沼の主になった。

倉石村の民話（話者名と題名）

☆槍沢（採話地区名）
清水アイ
「鬼の酒盛」・・・

話者名不明
「きつねにばかされた話②」　八九
☆向平（むかいたい）
向平たき
「きつねの話」　八九
☆小渡
小渡正夫
「田っこ作り」　八九
☆山田
高村キヌ
「桃太郎」　三〇
「田っこ作り」　三一
「てまり歌」　八六
「あやとり歌（お手玉歌）①」　八七
☆太田
竹原サト
「花咲かじじい」　三六
「かちかち山」　三八
「ネズミの嫁入り」　三八
「きつねの嫁入り」　三九
「和尚と小坊」　三九
「鬼のばくち」　四〇
「長い話②」　四一
「ザシキワラシの話①」　五九
「きつねの馬車」　六二
「牧内沼の主の伝説」　七〇
「あやとり歌（お手玉歌）②」　八七
「うた」　八八

小原トキ
「きつねにだまされた話⑤」　六二
中田稲弘
「田っこ作り」　三一
「うそつきの話」　三二
「海を見たことのない夫婦の話」　三六
「馬鹿むこ」　三五
「長い話①」　三六
竹原キヨ
「桃太郎」　四一
竹原　はるよ
「梅こ花こ」　三三
「きつねにだまされた話⑥」　六二
☆北向
今川秀人
「マタギの話」　五九
「北向のえんぶり」　七三
「十和田湖の話」　七四
今川いせ
「継子話」（子安様になった継母）　二六
「蛇むこ入り」　二七
「うりひめこ」　二八
「馬鹿むこ」　二九
「食わず女房」　二九
「箱の中にガマのいた話」　三〇
「きつねにだまされた話②」　六〇
「きつねにだまされた話③」　六〇
「きつねにだまされた話④」　六一
「弘法大師様の話」　六八
「はあきの神様」　六八
「牧内の沼の主」　六九
「桑の木をまつるようになった話」　七四
「小川原湖の主」　七四

「八郎太郎の伝説」　七五
「柿の木斎藤の話」　八一
「三つのオダキ様」　八一
「わらべ歌」　八四
「子守り歌」　八五
「なぞ」　八五

☆沼沢
沼沢キヌ
「おむすびころりん」　二五

☆宮台
漆戸清治
「きつねの三味線弾き」　四三
「鬼の賭博」　四三
「歌う骸骨」　四四
「屁ひり女房」　四六
「絵猫とネズミ」　四八
「豆腐の好きな和尚」　四九
「長い話」　四九
「きつね捕り」　六三

☆舘町（たてまち）
柏田新太郎
「なまけ者と大黒様」　五〇
「きつねに化かされた話①」　六一
「牧内沼のカレイ」　七一
「北向の権現様」　七二
「火事を逃れた権現様」　七二
「八太郎伝説」　七七

☆牧内（まきない）
宮崎春治
「うそつきの話」　四二
「ネズとカエル」　四二

「牧内沼の主」　・・・

編集後記

涼しかった倉石村での五日間の調査を終えて、千葉に戻ってきた私達は、記録的な猛暑の中、翻字作業にとりかかりました。

テープを小刻みに聞いては巻き戻し、また、聞いては巻き戻すことを何度くり返したことでしょう。一人あたり二本のテープに何日も費やしたのに、こうしてできあがった民話集をみると、例年になく「穴」が多く、恥ずかしい限りです。

一生懸命語ってくださったおばあさん、おじいさんの顔が思い浮かび、生き生きとした南部地方の言葉を文字にできないもどかしさ、自分達の力のなさを痛感します。

最後に、民話集の作成にご協力くださったすべての方々に心からお礼申し上げます。

千葉大学日本文化研究会　民話分科会一同

『むかしあったじ』
（青森県三戸郡倉石村の民話）
一九八三年（昭和五八年）十一月一日発行
【発行者】　千葉大学日本文化研究会　民話分科会
【発行所】　千葉大学日本文化研究会

リポジトリ公開用覆刻版
『むかしあったじ』
（青森県三戸郡倉石村の民話）
【覆刻版発行者】
千葉大学（旧）日本文化研究会民俗資料編纂室
代　表　　日本文化研究会初代会長　加部恒雄
【覆刻版発行日】　二〇一九年十二月二日
https://doi.org/10.20776/106361